常磐自動車道遺跡調査報告50

原（はら）Ｂ遺跡
朴迫（ほおのきさく）Ｂ遺跡
朴迫（ほおのきさく）Ｃ遺跡
東畑（ひがしはた）遺跡
上平（うわだいら）Ａ遺跡（４次調査）

序　　文

福島県浜通り地方を縦貫する常磐自動車道は，昭和63年に埼玉県三郷～いわき中央間，平成11年にいわき中央～いわき四倉間，平成14年にはいわき四倉～広野間，平成16年には広野～常磐富岡間が開通し，現在は富岡～相馬間で工事が進められています。

この常磐自動車道建設用地内には，先人が残した貴重な文化遺産が所在しており，周知の埋蔵文化財包蔵地を含め，数多くの遺跡等を確認しております。

埋蔵文化財は，それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に，我が国の歴史・文化等の正しい理解と，将来の文化の向上発展の基礎をなすものです。

福島県教育委員会では，常磐自動車道建設予定地内で確認されたこれらの埋蔵文化財の保護・保存について，開発関係機関と協議を重ね，平成５年度以降，埋蔵文化財包蔵地の範囲や性格を確かめるための試掘調査を行い，その結果をもとに，平成６年度から，現状保存が困難な遺跡については記録として保存することとし，発掘調査を実施してきました。

本報告書は，平成18年度に行った双葉郡大熊町の上平Ａ遺跡及び双葉郡浪江町の原Ｂ遺跡・朴廹Ｂ遺跡・朴廹Ｃ達跡・東畑遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。この報告書を県民の皆様が，文化財に対する御理解を深め，地域の歴史を解明するための基礎資料として，さらには生涯学習等の資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に，発掘調査から報告書の作成にあたり，御協力いただいた東日本高速道路株式会社，大熊町教育委員会，浪江町教育委員会，財団法人福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し，感謝の意を表するものであります。

平成19年12月

福島県教育委員会

教育長　　野　地　陽　一

あ い さ つ

財団法人福島県文化振興事業団では，福島県教育委員会からの委託により，県内の大規模な開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査業務を行っております。

常磐自動車道建設にかかる発掘調査は，平成６年度から開始し，いわき四倉ＩＣから富岡ＩＣ予定地間については楢葉パーキングエリアの一部を除き，平成13年度までに発掘調査を終了しております。

また，平成14年度からは富岡ＩＣから相馬ＩＣ予定地間にかかる遺跡の調査を本格的に開始し，平成18年度には大熊町・浪江町・南相馬市・相馬市に所在する18遺跡について調査を実施いたしました。

本報告書は，平成18年度に実施した発掘調査のうち，大熊町に所在する上平Ａ遺跡（４次調査)，浪江町に所在する原Ｂ遺跡・朴廹Ｂ遺跡・朴廹Ｃ遺跡・東畑遺跡の調査成果をまとめたものです。

上平Ａ遺跡・原Ｂ遺跡からは縄文時代の竪穴住居跡や土坑が，朴廹Ｂ遺跡・朴廹Ｃ遺跡からは平安時代の製鉄生産関連遺構の木炭窯跡が，東畑遺跡からは近世の区画溝が発見されました。

今後，これらの調査成果を歴史研究の基礎資料として，さらに地域社会を理解することや生涯学習に幅広く活用していただければ幸いに存じます。

終わりに，この調査に御協力いただきました大熊町，浪江町並びに地域住民の皆様に，深く感謝申し上げますとともに，埋蔵文化財の保護に対し，今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成19年12月

財団法人　福島県文化振興事業団

理事長　　富　田　孝　志

緒　　言

1　本書は，平成18年度に実施した常磐自動車道（いわき工区）遺跡調査の発掘調査報告である。

2　本書には，平成18年度に実施した常磐自動車道（いわき工区）遺跡調査のうち，双葉郡浪江町に所在する原Ｂ遺跡・朴迫Ｂ遺跡・朴迫Ｃ遺跡・東畑遺跡，大熊町に所在する上平Ａ遺跡（４次調査）の調査成果を収録した。

3　本事業は，福島県教育委員会が東日本高速道路株式会社の委託を受けて実施し，調査・報告にかかる費用は東日本高速道路株式会社が負担した。

4　福島県教育委員会では，発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団に委託して実施した。

5　財団法人福島県文化振興事業団では，遺跡調査部の次の職員を配し調査にあたった。

副　主　幹　吉田　　功　　文化財主査　吉野　滋夫

文化財副主査　阿部　知己　　嘱　　託　髙林　真人（平成19年３月まで現職）

嘱　　託　林　紘太郎（平成19年３月まで現職）

6　本書の執筆にあたっては，調査を担当した調査員が分担して行い，文責は章・節末または文末に示した。

7　赤色顔料の分析にあたっては，文化財主事　小林　啓が遺跡調査部設置のエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置を用いて行った。

8　本書の掲載した自然科学分析は次の機関に依頼し，その結果は付章に掲載した。

炭化材の年代測定	株式会社加速器分析研究所
樹種同定	株式会社古環境研究所
鉄塊系遺物の化学分析	ＪＦＥテクノリサーチ株式会社 分析・評価事業部千葉事業所
石質鑑定	株式会社古環境研究所

9　本書に掲載した地図は，平成18年度に国土地理院長の承認を得て，同院発行の2.5万分の１及び５万分の１地形図を複製使用したものである。「（承認番号）平19東複第142号」

10　引用・参考文献は執筆者の敬称を省略し，各編ごとにまとめて掲載した。

11　本書に収録した遺跡の調査記録及び出土資料は，福島県教育委員会が保管している。

12　発掘調査から本報告書を作成するまでに，次の機関からご指導・御助言をいただいた。

浪江町教育委員会　　大熊町教育委員会　　大熊町文化センター

用　　例

1　本書の遺構実測図の用例は，次の通りである。

（1）座 標 値　上平Ａ遺跡の座標値は，１次調査を踏襲して日本国土座標第Ⅸ系で設定した。その他の４遺跡の座標値は，世界測地系で設定した。

（2）方　　位　図中の方位は上平Ａ遺跡では真北，その他の４遺跡では座標北を示す。表記がない遺構図は，全て図の真上を真北または座標北とする。

（3）縮 尺 率　挿図のスケールは右脇のカッコ内に示す。木炭窯跡は１/60または１/80,竪穴住居跡は１/40,土坑・集石遺構・土器埋設遺構は１/30で採録した。

（4）ケ　　バ　遺構内の傾斜部は ▥ の記号で表現し，相対的に緩傾斜の部分は〒〒で表現した。また，後世の撹乱部や人為的な削土部は〒〒の記号で表現した。

（5）土　　層　遺構外堆積土はローマ数字でＬⅠ・Ⅱ…，遺構内堆積土は算用数字でℓ１・２とした。土色については，『新版標準土色帖22版』（小山正忠・竹原秀雄編著1999日本色研事業株式会社発行）を基準とした。

（6）線　　種　実線は上端・下端・撹乱範囲・調査区境。
破線は推定線・抉り込み線を示す。その他の場合は，用例を挿図中に示した。

（7）標　　高　海抜高度を示す。

（8）網　　点　遺構に関する網点等の用例は，挿図中に示した。

（9）ピットの深さ　ピット番号脇の（　）内には検出面からの深さ（㎝）を示す。

2　本書における遺物実測図等の用例は，次の通りである。

（1）縮 尺 率　挿図のスケール右脇に表示した。原則的には，土器・土製品を１/２・１/３縮尺，石器を１/２，拓本を２/５または１/３で採録した。挿図中に，２個以上スケールがある時は，スケール右下に対象となる遺物の番号を示した。

（2）遺物番号　遺物は挿図ごとに通し番号を付した。文中における遺物番号は，例えば，図１の２番の遺物を「図１－２」とし，挿図中では「１図２」とし，写真図版中では「１－２」と表示した。

（3）遺物註記　出土グリッド，出土層位は遺物番号の右脇に表示した。
上平Ａ遺跡・朴殆Ｃ遺跡での遺物の取り上げの時には，10ｍグリッドを５ｍ方眼に４分割した。この方眼は，北西から時計回りに「１～４」と番号を付した。出土グリッドの表示は，例えば，Ｄ８グリッドの４番目の方眼から出土した場合，「Ｄ８－４」と表示した。

（4）計 測 値　計測値・石質は各実測図脇に表示した。（　）内の数値は推定値，［　］内の数値は遺存値を示す。

（5）遺物断面　粘土積上痕は一点鎖線で表記した。胎土に植物繊維を混和する土器は，断面に▲で示した。

（6）網　　点　遺物に関する網点等の用例は各挿図に示した。

3　本文中で使用した略号は次の通りである。

浪江町－ＮＥ	大熊町－ＯＫ	原Ｂ遺跡－Ｈ・Ｂ
朴殆Ｂ遺跡－ＨＺ・Ｂ	朴殆Ｃ遺跡－ＨＺ・Ｃ	東畑遺跡－ＨＨ
上平Ａ遺跡－ＵＤ・Ａ	グリッド－Ｇ	遺構外堆積土－Ｌ
遺構内堆積土－ℓ	竪穴住居跡－ＳＩ	木炭窯跡－ＳＣ
土　　坑－ＳＫ	溝　　跡－ＳＤ	小　　穴－ＰまたはＧＰ

目　　次

序　　章

第１節　調査の経緯……1

第２節　遺跡の位置と自然環境……5

第３節　歴史的環境……9

第１編　原Ｂ遺跡

第１章　周辺地形と調査経過 ……17

第１節　遺跡の位置と周辺地形……17

第２節　調 査 経 過……17

第３節　調査の方法……18

第２章　遺構と遺物……19

第１節　遺構の分布と基本土層……19

第２節　縄文土器の分類……21

第３節　土　　坑……22

1 号 土 坑（22）　2 号 土 坑（23）　3 号 土 坑（23）　4 号 土 坑（23）

5 号 土 坑（24）　6 号 土 坑（24）　7 号 土 坑（24）　8 号 土 坑（25）

9 号 土 坑（25）　10 号 土 坑（26）　11 号 土 坑（26）　12 号 土 坑（26）

13 号 土 坑（30）　14 号 土 坑（30）　15 号 土 坑（31）　16 号 土 坑（31）

17 号 土 坑（31）　18 号 土 坑（33）　19 号 土 坑（33）　20 号 土 坑（33）

21 号 土 坑（35）

第４節　焼 土 遺 構……35

１号焼土遺構（35）

第５節　溝　　跡……35

１・２号溝跡（37）

第６節　遺物包含層……39

遺物の出土状態（39）　遺　　物（39）

第３章　ま　と　め……44

第２編　朴廹Ｂ遺跡

第１章　周辺地形と調査経過……55

第１節　遺跡の位置と周辺地形……55
第２節　調 査 経 過……55
第３節　調査の方法……57
第２章　遺構と遺物……59
第１節　遺構の分布と基本土層……59
第２節　木 炭 窯 跡……60
１号木炭窯跡（60）
第３節　土　　坑……62
１ 号 土 坑（62）　２ 号 土 坑（62）　３ 号 土 坑（62）　４ 号 土 坑（64）
５ 号 土 坑（64）　６ 号 土 坑（65）　７ 号 土 坑（65）　８ 号 土 坑（65）
９ 号 土 坑（67）　10 号 土 坑（67）　11 号 土 坑（68）　12 号 土 坑（69）
13 号 土 坑（69）
第４節　遺物包含層……70
第３章　ま　と　め……78

第３編　朴廹Ｃ遺跡

第１章　周辺地形と調査経過 ……87
第１節　遺跡の位置と周辺地形……87
第２節　調 査 経 過……88
第３節　調査の方法……88
第２章　遺構と遺物……91
第１節　遺構の分布と基本土層……91
第２節　木 炭 窯 跡……92
１号木炭窯跡Ａ～Ｄ面（94）　１号木炭窯跡Ｅ～Ｉ面（98）　２号木炭窯跡（101）
３号木炭窯跡（105）　４号木炭窯跡（108）　５号木炭窯跡（109）
７号木炭窯跡（116）　８号木炭窯跡（117）
第３節　土　　坑 ……122
１ 号 土 坑（123）　２ 号 土 坑（123）　４ 号 土 坑（123）　５ 号 土 坑（123）
６ 号 土 坑（124）　７ 号 土 坑（124）
第４節　溝　　跡 ……126
１ 号 溝 跡（126）　２ 号 溝 跡（127）　３ 号 溝 跡（127）　４ 号 溝 跡（127）
第５節　遺物包含層 ……129
遺物の出土状態（129）　遺　　物（129）
第３章　ま　と　め ……130

第４編　東畑遺跡

第１章　周辺地形と調査経過……147
第１節　遺跡の位置と周辺地形 ……147
第２節　調 査 経 過 ……147
第３節　調査の方法 ……149
第２章　遺　　構 ……151
第１節　遺構の概要と基本土層 ……151
第２節　溝跡・小穴 ……151
１ 号 溝 跡（151）　小　　穴（151）
第３章　ま　と　め ……153

第５編　上平Ａ遺跡（４次調査）

第１章　周辺地形と調査経過……159
第１節　遺跡の位置と周辺地形 ……159
第２節　調 査 経 過 ……159
第３節　調査の方法 ……162
第２章　遺構と遺物 ……162
第１節　遺構の分布と基本土層 ……162
第２節　縄文土器の分類 ……165
第３節　竪穴住居跡 ……167
22号住居跡（168）
第４節　土　　坑 ……169
25 号 土 坑（169）　104号土坑（169）　105号土坑（171）　106号土坑（171）
第５節　遺物包含層 ……172
遺物の出土状態（172）　遺　　物（172）
第３章　ま　と　め ……178

付編１　福島県双葉郡浪江町朴廹Ｃ遺跡出土木炭の放射性年代測定結果 ……183
付編２　福島県双葉郡浪江町原Ｂ遺跡，朴廹Ｃ遺跡出土
炭化材・木炭の樹種同定結果 ……185
付編３　福島県双葉郡浪江町朴廹Ｃ遺跡出土鉄滓の化学分析結果 ……188

挿図・表・写真目次

序　章

［挿　図］

図１　常磐自動車道位置図……１
図２　常磐自動車道路線図（１）……３
図３　常磐自動車道路線図（２）……４
図４　遺跡周辺の環境（１）……６
図５　遺跡周辺の環境（２）……７
図６　上平Ａ遺跡周辺の地形断面図……８
図７　周辺の遺跡（１）……10
図８　周辺の遺跡（２）……13

［　表　］

表１　浪江町周辺の遺跡一覧……11

第１編　原　Ｂ　遺　跡

［挿　図］

図１　原Ｂ遺跡調査区位置図……17
図２　遺構配置図……20
図３　基本土層……21
図４　１～４・６号土坑……27
図５　５・７・８・12号土坑……28
図６　９～11号土坑……29
図７　13～17号土坑……32
図８　18～21号土坑……34
図９　１号焼土遺構……35
図10　土坑出土遺物……36
図11　土坑・溝跡出土遺物（１）……37
図12　土坑・溝跡出土遺物（２）……38
図13　グリッド別出土遺物点数……40
図14　遺物包含層出土遺物（１）……41
図15　遺物包含層出土遺物（２）……42
図16　遺物包含層出土遺物（３）……43

［　表　］

表１　原Ｂ遺跡Ⅰ群土器の出土割合……45

［写　真］

１　調査区全景（１）……47
２　調査区全景（２），基本土層……48
３　土坑（１）……49
４　土坑（２）……50
５　土坑（３），焼土遺構……51
６　出土遺物……52

第２編　朴 廹 Ｂ 遺 跡

［挿　図］

図１　朴廹Ｂ遺跡調査区位置図……56
図２　遺構配置図……58
図３　基本土層……59
図４　１号木炭窯跡……61
図５　１～４号土坑……63
図６　２・４号土坑出土遺物……64
図７　５～９号土坑……66
図８　10～13号土坑……68
図９　遺物包含層縄文土器出土点数（ＬⅡ）……70
図10　遺物包含層出土遺物（１）……71
図11　遺物包含層出土遺物（２）……73
図12　遺物包含層出土遺物（３）……74
図13　遺物包含層出土遺物（４）……75
図14　遺物包含層出土遺物（５）……76
図15　遺物包含層出土遺物（６）……77

［写　真］

１　調査区遠景……79
２　調査区全景……79
３　１号木炭窯跡……80
４　１～８号土坑……81
５　９～13号土坑，作業風景……82
６　遺物包含層出土遺物（１）……83
７　遺物包含層出土遺物（２）……83
８　遺物包含層出土遺物（３）……84
９　遺物包含層出土遺物（４）……84

第３編　朴 廹 Ｃ 遺 跡

［挿　図］

図１　朴廹Ｃ遺跡調査区位置図……87
図２　遺構配置図……90
図３　基本土層……91
図４　１・３号木炭窯跡周辺……95
図５　１号木炭窯跡（１）……96
図６　１号木炭窯跡（２）……97
図７　１号木炭窯跡（３）……99
図８　１号木炭窯跡（４）……100
図９　２・４・５・７号木炭窯跡周辺……101
図10　２号木炭窯跡（１）……102
図11　２号木炭窯跡（２）……103
図12　３号木炭窯跡（１）……106
図13　３号木炭窯跡（２）……107
図14　４号木炭窯跡（１）……110
図15　４号木炭窯跡（２）……111
図16　５・７号木炭窯跡周辺……112
図17　５号木炭窯跡（１）……114
図18　５号木炭窯跡（２）……115
図19　７号木炭窯跡（１）……118
図20　７号木炭窯跡（２）……119
図21　８号木炭窯跡……120
図22　木炭窯跡周辺出土遺物（１）……121
図23　木炭窯跡周辺出土遺物（２）……122
図24　１・２・４～６号土坑……125
図25　７号土坑……126
図26　１～３号溝跡……128
図27　４号溝跡……129
図28　遺物包含層出土遺物……130

［写　真］

1　調査区全景……133
2　基本土層，２・４・５・７号木炭窯跡……134
3　１号木炭窯跡……135
4　２号木炭窯跡……136
5　２・４号木炭窯跡……137
6　３号木炭窯跡……138
7　５・７号木炭窯跡（１）……139
8　５・７号木炭窯跡（２）……140
9　５・７号木炭窯跡（３）……141
10　８号木炭窯跡，１・２号土坑……142
11　４～７号土坑，１・２・４号溝跡……143
12　出土遺物……144

第４編　東　畑　遺　跡

［挿　図］

図１　東畑遺跡調査区位置図……148
図２　遺構配置図・基本土層……150
図３　１号溝跡・小穴……152

［写　真］

1　調査前近景……155
2　Ⅰ・Ⅱ区近景……155
3　１号溝跡……156

第５編　上 平 Ａ 遺 跡（４次調査）

［挿　図］

図１　上平Ａ遺跡調査区位置図……160
図２　遺構配置図……163
図３　基本土層……165
図４　22号住居跡……168
図５　25・104～106号土坑……170
図６　土坑出土遺物……171
図７　グリッド別出土遺物点数……173
図８　遺物包含層出土遺物（１）……174
図９　遺物包含層出土遺物（２）……175
図10　遺物包含層出土遺物（３）……176
図11　遺物包含層出土遺物（４）……177

［写　真］

1　調査区全景（１）……179
2　調査区全景（２）……180
3　基本土層，22号住居跡……181
4　22号住居跡，25・104～106号土坑……182
5　出土遺物……182

［付編１　図］

図１　暦年補正結果……184

［付編１　表］

表１　放射性炭素年代測定結果 ……184
表２　暦年較正年代 ……184

［付編２　表］

表１　原Ｂ遺跡，朴廻Ｃ遺跡における樹種同定結果 ……187

［付編２　写真］

写真１　原Ｂ遺跡，朴廻Ｃ遺跡出土炭化材・木炭 ……187

［付編３　図］

図１　出土鉄滓類の全鉄量と二酸化チタン量の分布図 ……191
図２　製錬滓と鍛冶滓の分類 ……191
図３　砂鉄系鍛冶滓と鉱石系製錬滓の分類 ……191
図４　FeO_n-TiO_2-SiO_2系平衡状態図 ……191
図５　Ｘ線回折結果図（１） ……191
図６　Ｘ線回折結果図（２） ……191

［付編３　表］

表１　調査資料・調査項目 ……188
表２　鉄塊遺物の化学成分分析結果 ……190
表３　鉄滓の化学成分分析結果 ……190
表４　鉄滓の顕微鏡鉱物組織とその観察状況 …192

［付編３　写真］

写真１　鉄滓外観写真・顕微鏡組織写真 ……192

序　　章

第１節　調 査 の 経 緯

１　平成17年度までの調査経過

常磐自動車道は，埼玉県三郷市を起点として，千葉県・茨城県・福島県浜通り地方を縦貫して宮城県に至る，太平洋沿岸の交通の大動脈として計画された路線である。この経過の内，三郷インターチェンジ(以下ＩＣと略す)～いわき市のいわき中央ＩＣまでは，昭和63年に供用が開始され，更に，いわき中央ＩＣ～いわき四倉ＩＣまでは平成11年３月に供用を開始している。

これらの供用が開始された区間の内，茨城県境からいわき中央ＩＣまでの間に所在する埋蔵文化財に関しては，昭和59・60年にいわき市教育委員会が財団法人いわき市教育文化事業団に委託して，４遺跡について発掘調査を実施した。いわき中央ＩＣ～いわき四倉ＩＣ間の埋蔵文化財に関しては，平成６年から平成９年まで好間～平赤井・平窪地区の10遺跡の発掘調査をいわき市教育委員会が財団法人いわき市教育文化事業団に委託して実施し，四倉町大野地区10遺跡の発掘調査を，福島県教育委員会が財団法人福島県文化センター(現，財団法人福島県文化振興事業団)に委託して実施した。

いわき四倉ＩＣ以北の路線については，平成３年にいわき市四倉ＩＣ～富岡ＩＣ間が西部計画路線に格上げされ，平成５年には施工命令が下されている。更に，富岡ＩＣ以北についても，平成８年に相馬ＩＣまでの区間が整備計画路線となり，平成10年に施工命令が出されている。

福島県教育委員会では，いわき四倉ＩＣ以北の路線内に所在する埋蔵文化財に関して，平成６年

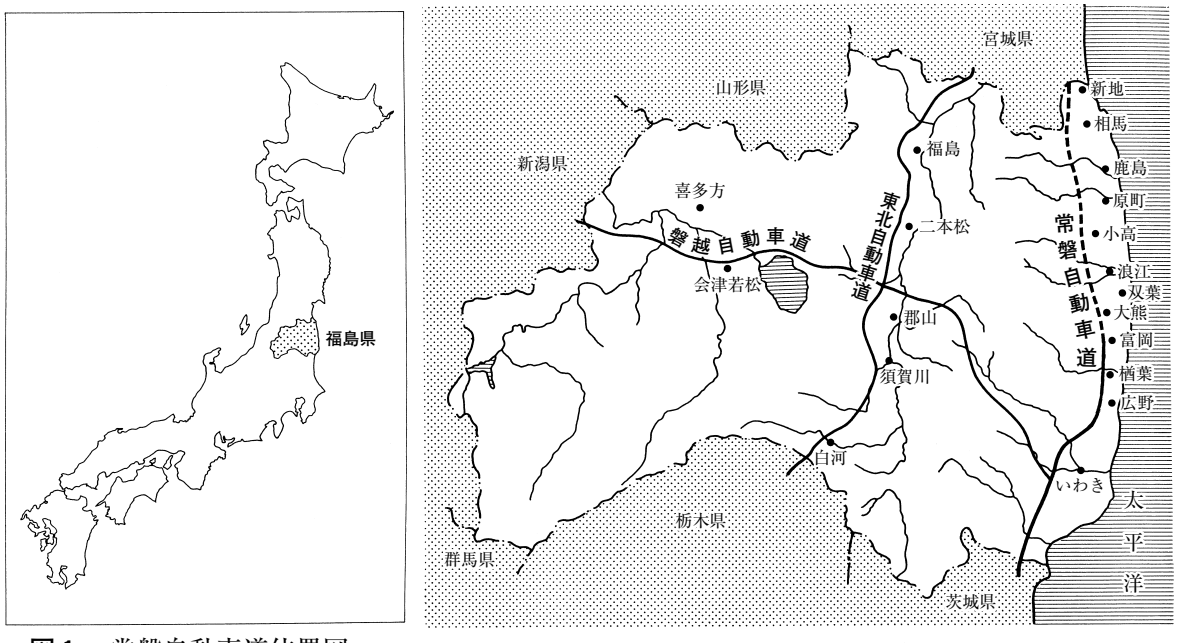


図１　常磐自動車道位置図

度より表面調査を実施し，平成10年度までに宮城県境まで終了している。この成果を受けて，平成７年度よりいわき四倉ＩＣ～富岡ＩＣ間の試掘調査を実施し，平成９年度からは同区間に所在する遺跡の発掘調査が開始された。平成９年度はいわき市内５遺跡と広野町内の１遺跡の発掘調査を実施し，平成10年度はいわき市内の４遺跡，広野町内の３遺跡，楢葉町内の３遺跡，富岡町内の２遺跡の発掘調査を実施した。この平成10年度の調査により，路線内に所在する遺跡の内，いわき市内の遺跡の発掘調査を全て終了した。平成11年度は，広野町内の４遺跡，楢葉町内の５遺跡について調査を実施した。平成12年度は，広野町内の１遺跡，楢葉町内の７遺跡，富岡町内の５遺跡について調査を実施した。この12年度の調査により，路線内に所在する遺跡の内，広野町内の遺跡の発掘調査を全て終了した。平成13年度の調査では，楢葉町内の１遺跡，富岡町内の５遺跡について発掘調査を実施し，楢葉パーキングエリアに関わる大谷上ノ原遺跡20,400㎡の保存範囲を残して楢葉町内の発掘調査を終了した。平成14年度は，富岡町の１遺跡，大熊町の２遺跡について発掘調査を実施した。なお，平成14年度には，当初富岡ＩＣまでについては日本道路公団東北支社(現，東日本高速道路株式会社東北支社)いわき工事事務所，富岡ＩＣ以北については相馬工事事務所がそれぞれ管轄していたが，７月より富岡ＩＣ～浪江町までの区間についてもいわき工事事務所が管轄することとなった。平成15年度は，相馬工事事務所が管轄する区域でも発掘調査が実施されるようになり，いわき工区で浪江町の２遺跡，相馬工区で相馬市の２遺跡について発掘調査を実施した。平成16年度は，いわき工区で大熊町の３遺跡，相馬工区で相馬市の１遺跡，鹿島町(現，南相馬市鹿島区)の２遺跡について発掘調査を実施した。平成17年度は，いわき工区で大熊町の３遺跡，双葉町の２遺跡，浪江町の２遺跡，相馬工区で相馬市の１遺跡，南相馬市の５遺跡について発掘調査を実施した。

２　平成18年度の調査経過

平成18年度の常磐自動車道いわき工区に関わる遺跡発掘調査は，福島県教育委員会との委託契約に基づき遺跡調査部の職員７名を配置して実施した。計画段階では浪江町の仲禅寺遺跡を含め７遺跡，計21,000㎡の調査が予定されたが，工事計画の変更等もあり関係機関で協議した結果，調査対象遺跡および調査範囲の調整を行い，浪江町に所在する沢東Ｂ遺跡・原Ｂ遺跡・朴廹Ｂ遺跡・朴廹Ｃ遺跡・後田Ａ遺跡・東畑遺跡の６遺跡と大熊町に所在する上平Ａ遺跡の計７遺跡を対象に発掘調査を実施した。調査面積は総計で21,450㎡である。

東日本高速道路株式会社東北支社いわき工事事務所(以下，いわき工事事務所と略す)との事前協議を受けて，当初，浪江町内では仲禅寺遺跡の調査を優先に計画されたが，橋脚の設計変更等の事情により今年度の調査が見送られることとなったため，同じく優先度の高い大熊町の上平Ａ遺跡に加えて浪江町の沢東Ｂ遺跡・東畑遺跡の３遺跡について４月より調査を開始した。上平Ａ遺跡の調査は，農道の付け替え工事が終了したことを受けて４月10日から着手した。当初予定された300㎡に水路の付け替え部分を加えた370㎡の調査となったが，縄文時代前期の竪穴住居跡等を検出，遺物も縄文土器・石器のほか玦状耳飾が出土した。農繁期でもあり，いわき工事事務所から依頼され

た農道の埋め戻しを行って５月11日には調査を終了し，浪江町原Ｂ遺跡の調査へと移行した。

東畑遺跡では，町道部分50㎡を除いた800㎡の調査に着手，試掘調査で確認された近世の区画施設と推定される溝跡を検出し，４月28日には調査を終了した。東畑遺跡の調査区は町道に接し民家にも近いことから，調査区全体の埋め戻しを行った後に引き続き後田Ａ遺跡の調査へと移行した。

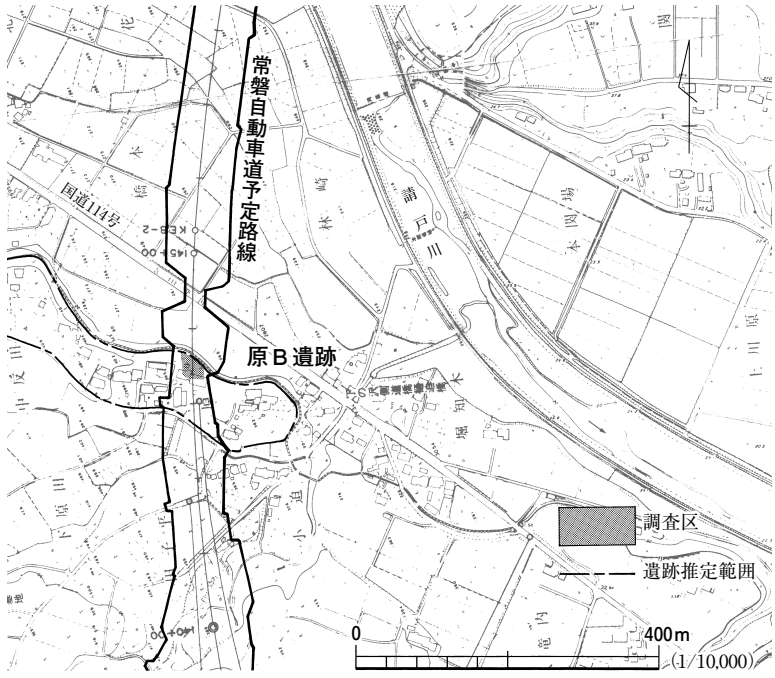


図２　常磐自動車道路線図（１）

沢東Ｂ遺跡は，当初14,150㎡の調査が予定されたが，今回，現況の道路・水路部分970㎡の調査が先送りされたことから13,280㎡の調査となった，調査での排土置場を確保する必要もあり，町道および水路で区画された元の水田の単位を基に調査を進めることとし，南側の区画より調査を開始した。６月には調査区南域で中・近世の建物跡・井戸跡等のほかに縄文時代中期の複式炉を持つ竪穴住居跡を検出した。

７月には各遺跡の調査で梅雨の長雨に悩まされることとなったが，原Ｂ遺跡の調査では，縄文時代早期の遺物包含層に加えて貯蔵穴と推定される土坑群が検出された。７月28日には調査を終了したが，民家に隣接する状況から，いわき工事事務所の要望により埋め戻しを実施した。後田Ａ遺跡では，大堀相馬焼の陶器窯跡の一部を調査，その大部分が高速道路の用地外となるため，遺構の詳細は不明ながらも出土した陶器類から18世紀後半期の操業の窯跡であることが明らかとなった。なお，調査終了後に隣接地に残る窯跡との境界部分をブルーシートと土嚢を使って養生し保護を図った。

８月には朴廹Ｃ遺跡の調査に着手，試掘調査で確認された平安時代の木炭窯跡の調査と併行して，弥生土器の出土した調査区南側の丘陵頂部から斜面にかけて遺構検出作業を進めたが，竪穴住居跡等は確認されなかった。また，今年度仲禅寺遺跡の調査が見送られ，沢東Ｂ遺跡と東畑遺跡で調査面積が減った代替えとして，いわき工事事務所と協議の結果，朴廹Ｂ遺跡2,500㎡の調査を今年度に実施することとなり，８月21日より調査を開始した。朴廹Ｂ遺跡の調査では，試掘調査で確認された縄文時代早・前期の遺物包含層以外に，平安時代と推定される木炭窯跡等が検出され，近隣の朴廹Ｃ遺跡とともに製鉄関連遺跡としての一面も明らかとなった。沢東Ｂ遺跡の調査は北側の調査区へと進み，平成15年度に実施した１次調査の続きとなる溝で区画された施設を確認した。今回の調査区からは，新たに溝に架かる橋跡とそれに続く門跡を検出し，陶器類のほかに漆器・橋脚

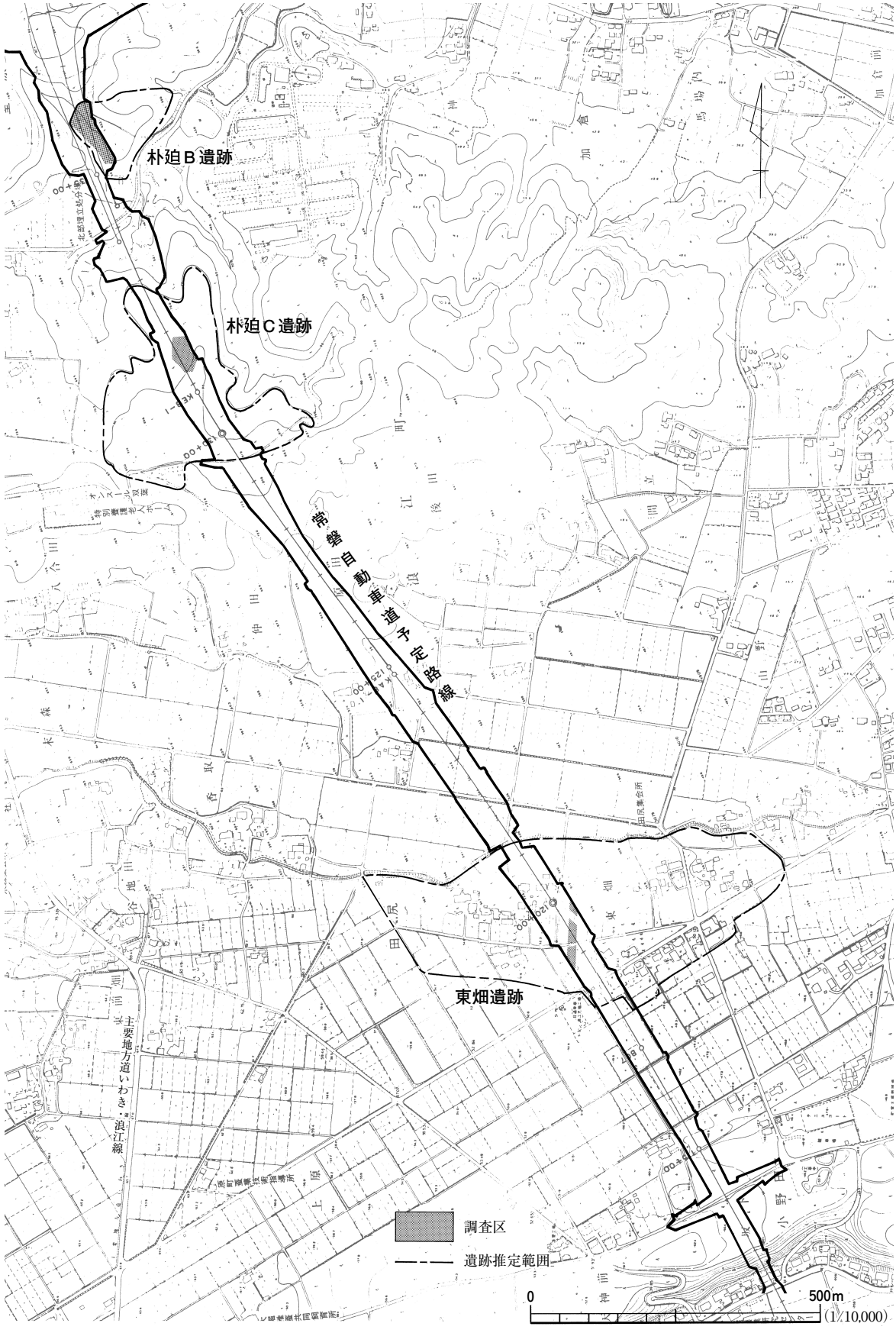


図３　常磐自動車道路線図（２）

の杭等の木製品も出土した。

９月以降は，度重なる大雨の影響で沢東Ｂ遺跡では調査区全体が水没し，排水作業に予定外の時間を費やすこととなった。他の遺跡でも発掘作業の中断を余儀なくされたが，11月には天気も安定し調査工程の遅れを取り戻すため作業の進捗を図った。その結果，11月17日に朴廹Ｂ遺跡の調査を終了，12月８日には沢東Ｂ遺跡の調査も終了にこぎ着けることとなった。なお，沢東Ｂ遺跡の今年度の調査区は付近一帯が水田地帯であるため，雨量によっては水没の恐れがあり工事の着工にもまだ間があることから，いわき工事事務所の依頼で調査区全域の埋め戻しを行った。最後に残った朴廹Ｃ遺跡の調査では，木炭窯跡の度重なる造り替えが確認されたため当初予定した調査期間を大幅に延長することとなったが，12月22日には調査を終了し木炭窯跡の埋め戻しを行って現地での作業をすべて終了した。

（吉　田）

第２節　遺跡の位置と自然環境

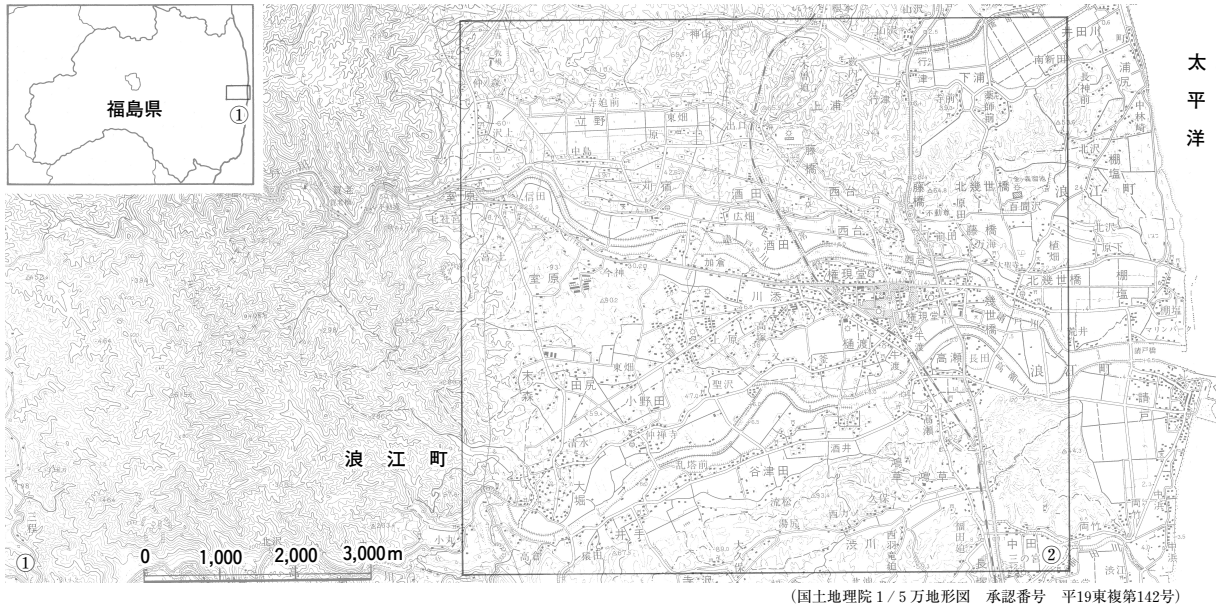
福島県は東北地方南端に位置し，面積13,782㎢である。この内，およそ８割は山地で占められ，東部には太平洋に沿って阿武隈山地，中央部には奥羽山脈，西部には越後山脈がせまっている。これらの山地はほぼ南北に走り，県内は太平洋側より「浜通り地方」・「中通り地方」・「会津地方」の三地域に区分される。

浪　江　町　第１～４編で扱う原Ｂ遺跡・朴廹Ｂ遺跡・朴廹Ｃ遺跡・東畑遺跡は，浜通り地方中央部の双葉郡内に所在する。行政区分では，原Ｂ・朴廹Ｂ・朴廹Ｃ遺跡は双葉郡浪江町室原地区に，東畑遺跡は双葉郡浪江町田尻地区に位置する。

浪江町を流れる主な河川は，北から請戸川・高瀬川である。これらの河川は阿武隈高地に源を発し，山間部で急峻で樹枝状の渓谷が形成されている。双葉断層の東側に入ると河床勾配は緩やかになり，請戸川や高瀬川の河川両岸には河岸段丘地形が発達している。この段丘は，標高の高い方(年代の古いもの)から，高位段丘，中位Ⅰ，中位Ⅱ，中位Ⅲ，中位Ⅳ，低位Ⅰ，低位Ⅱ面と呼ばれる。浪江町内には主に中位面が発達しており，その大部分は隆起扇状地的な山麓河成平坦地である。これら中位段丘面は，更新世後期の最終間氷期(約７～13万年前)の海進・海退に伴って形成されたと考えられている(久保他1994)。

浪江町の地質構造は，浜通り低地帯の西縁を南北方向に走る双葉断層を境として東西で大きく異なる。断層の西側にあたる阿武隈高地の山間部には，中世代白亜紀の貫入花崗岩類が広く分布し，双葉断層に沿った周辺では，新生代新第三紀に形成された向山層・水野谷層・五安層・椚平層が帯状に発達している。一方，断層の東側にあたる海岸低地域には，中世代以降の主として堆積岩類が分布している。丘陵地の大部分には，新生代新第三紀に形成された大年寺層が分布している。

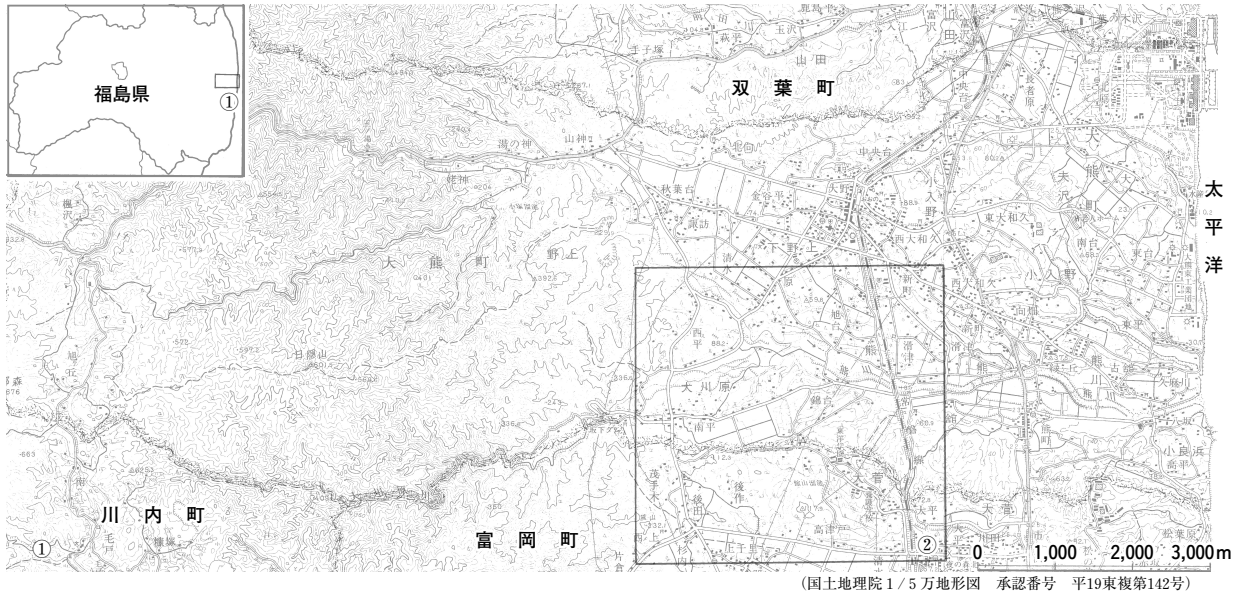
大　熊　町　第５編で扱う上平Ａ遺跡は，浜通り地方中央部の双葉郡内に所在する。行政区分では，双葉郡大熊町大川原地区に位置する。



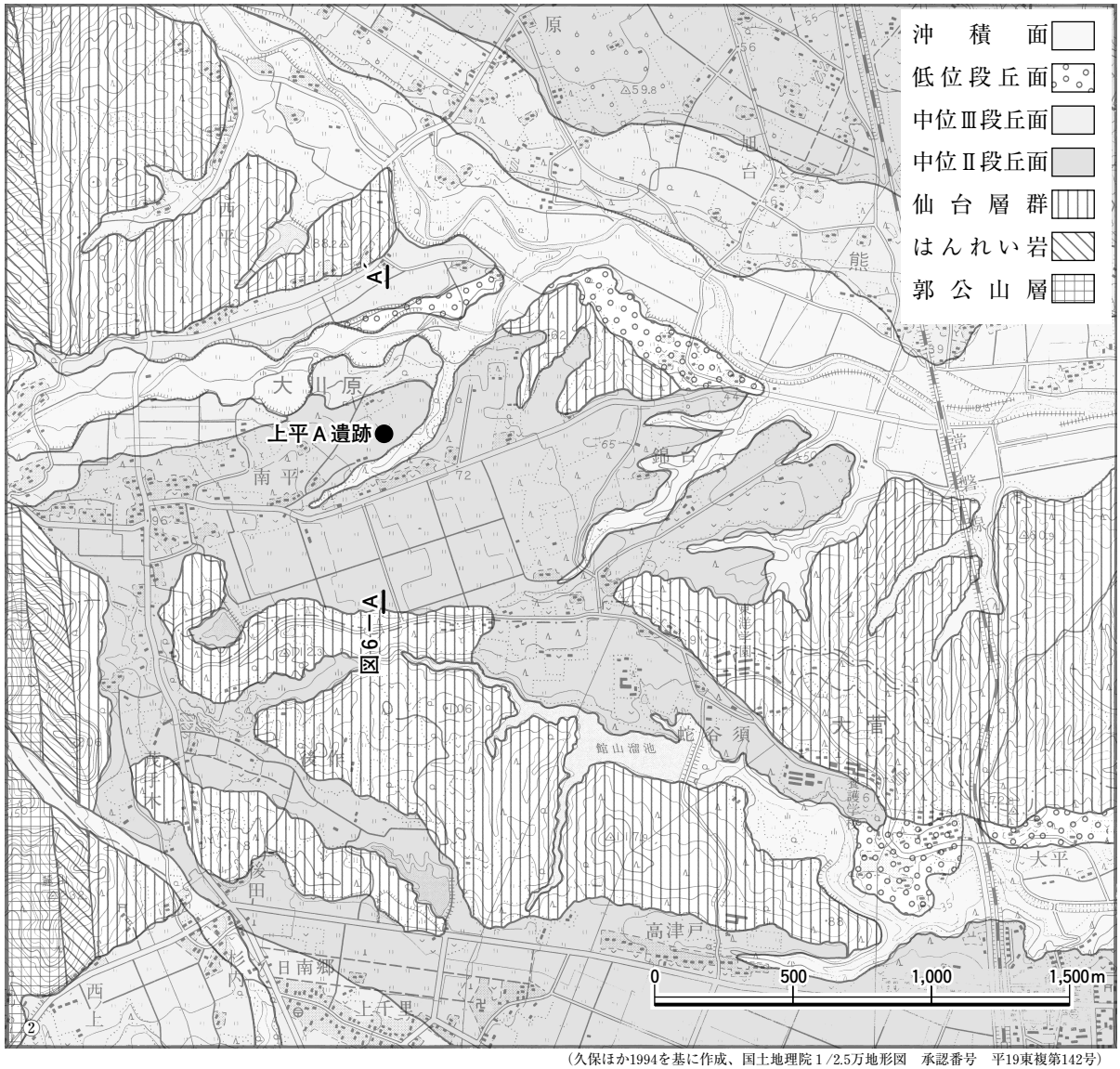
（国土地理院１／５万地形図　承認番号　平19東複第142号）

（久保ほか1994を基に作成、国土地理院１／５万地形図　承認番号　平19東複第142号）

図４　遺跡周辺の環境（１）（上：浪江町の地勢，下：浪江町の地形・地質）



（国土地理院１/５万地形図　承認番号　平19東複第142号）



（久保ほか1994を基に作成、国土地理院１/2.5万地形図　承認番号　平19東複第142号）

図５　遺跡周辺の環境（２）（上：大熊町・富岡町の地勢，下：大熊町富岡町の地形・地質）

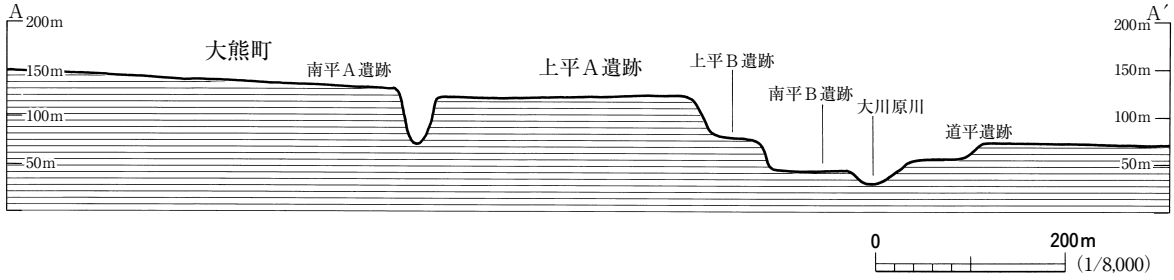


図６　上平Ａ遺跡周辺の地形断面図

大熊町を流れる主な河川は，北から夫澤川・小入野川・熊川である。これらの河川は阿武隈山地に源を発し，山間部では険峻で樹枝状の渓谷を刻んでいる。双葉断層の東側に入ると河床勾配は緩やかになり，熊川などの河川両岸には河岸段丘地形が発達している。

この段丘は，浪江町と同様に，標高の高いもの(年代の古いもの)から，高位，中位Ⅰ，中位Ⅱ，中位Ⅲ，中位Ⅳ，低位Ⅰ，低位Ⅱ面と呼ばれている(久保他1994)。この内，富岡・大熊町には主に中位面が発達し，その大部分は隆起扇状地的な山麓河成平坦面を形成している。

大熊町の地質構造は，浜通り低地帯の西縁を南北方向に走る双葉断層を境として東西で大きく異なっている。まず断層の西側にあたる阿武隈山地の山間部には，中生代白亜紀の貫入岩の花崗岩類が広く分布している。この阿武隈花崗岩類のなかには，斑糲岩やアプライト，結晶片岩などが散在的に発達する。また花崗岩類に伴出する有用鉱物は多目的に利用され，富岡町には1853(嘉永６)年より磁鉄鉱の採掘が始まった上手岡鉱山も存在し，海岸には砂鉄などの堆積も認められる。さらに双葉断層に沿った周辺では，破砕された未変成・弱変成の古生層(高倉山層・郭公山層)が，帯状に発達している。これら古生層の堆積物には，粘板岩・硬砂岩・チャートなどの堆積岩が含まれる。

本地域では中生代から第三紀中新世の地層の分布は希薄である。ちなみに石器石材として用いられている流紋岩は，第三紀中新世に形成された湯長谷層群椚平層・五安層に含まれていることが指摘されている(根本1991，楢葉町史地質)。このことから，本地域で流紋岩を採取することは難しく，椚平層・五安層が確認されている楢葉町・広野町・いわき市といった本地域より南に流紋岩の採取可能地が求められそうである。

次に鮮新世に形成された仙台層群は双葉断層東側の丘陵地に広く分布し，第四紀に形成された段丘面の基盤層を形成している。堆積物は半固結のシルト岩・凝灰岩からなり，多くの火山灰層を介在している。

(阿　部)

第３節　歴 史 的 環 境

浪　江　町　浪江町における原始・古代の遺跡については，最も古い時期のものは，旧石器時代まで遡ることができ，遺跡の数は少ないものの手子塚Ａ・西田原・北上ノ原・酒田原などの諸遺跡が確認されている(図７・表１参照)。

縄文時代の遺跡は，請戸川上流で多数確認されている。そのなかでも大柿遺跡は早期の遺跡である。百間沢遺跡は中期以降に比定される遺跡で，土偶・土面も出土している。順礼堂遺跡では後期に比定される集落跡で，石囲炉のある竪穴住居跡も発見されている。また，中平遺跡では中期から後期にかけての竪穴住居跡や，中期の埋甕が発見されている。

弥生時代の遺跡は少ないが，散布地としては上原・台・西台・塚ノ前などの諸遺跡があり，上原遺跡・金ヶ森遺跡からは石庖丁が出土している。

古墳時代には，請戸川・高瀬川に挟まれた沖積地と沿岸の段丘面に数多くの古墳が造られ，浜通り地方最古の古墳として知られる本屋敷古墳群や，浜通り地方でも有数の規模を誇る堂の森古墳・狐塚古墳がある。また，集落跡としては，鹿屋敷遺跡や塚の腰遺跡が挙げられる。

奈良・平安時代の代表的な遺跡としては，鹿屋敷遺跡がある。浪江町の発掘調査により，古墳時代から奈良・平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が多数確認されている。この他に，狐塚遺跡では９世紀中頃の竪穴住居跡が確認されている。

中世の浪江は標葉氏の所領で，相馬氏との勢力争いが頻繁に繰り広げられるが，1492(明応元)年には相馬氏により標葉氏が滅ぼされ，以後は相馬氏によって支配されている。城館跡は，標葉氏が居城とした大平山城跡，小丸城跡，権現堂城跡，泉古舘跡などの他に，多くの館跡が残されている。

近世では，熊川以北の標葉郷まで相馬藩の所領となる。この時代の遺構としては，出口一里塚や立野経塚，北原御殿跡などがある。1690(元禄３)年には相馬領大掘村で陶器窯業が盛んになり，相馬藩の保護と規制のもとで発展する。これに関連する遺跡としては，窯跡が確認された大堀長井屋窯跡や，灰原が検出された中平遺跡，散布地である神内遺跡，大堀Ａ・Ｂ遺跡がある。このほか，製鉄関連遺跡は太刀洗遺跡が調査されている。それ以外にも，高瀬川や請戸川の流域及び支流にも鉄滓の集積地が多数認められるので，製鉄遺跡の分布を窺うことができる。

大　熊　町　大熊町における原始・古代の遺跡については，戦後，竹島國基・檜野照武各氏により精力的な踏査が行われ，大平遺跡をはじめとして，数多くの遺跡が確認，周知されることとなった(図８参照)。その後も大熊町教育委員会による発掘調査や，町史編纂事業にともなう遺跡分布調査が行われ，『大熊町史第二巻』に収録された史料は，縄文時代を中心として福島県内でも屈指のものとなった。遺跡は，熊川・小入野川・夫澤川の各流域に分布している。特に熊川は中流域から下流域にかけて数多く分布している。

旧石器時代の遺跡としては小入野遺跡・南金谷遺跡・上総屋敷遺跡・北原・日向遺跡・北台遺跡

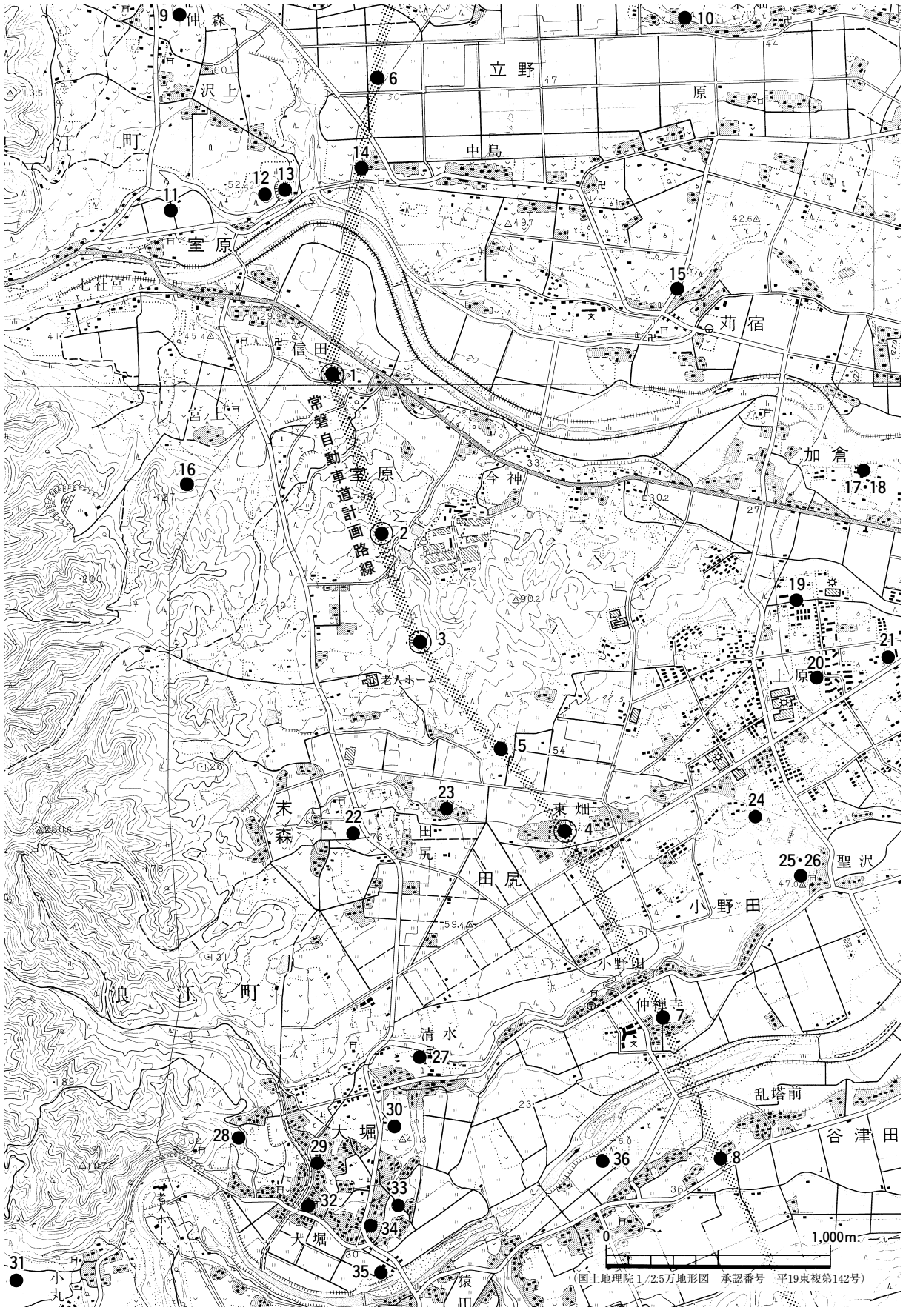

立野
原
中島
仲森
沢上
江町
室原
七社宮
信田
宮上
常磐自動車道計画路線
室原
今神
苅宿
加倉
上原
老人ホーム
末森
田尻
東畑
田尻
小野田
聖沢
小野田
仲禅寺
浪江町
清水
大堀
大堀
乱塔前
谷津田
猿田
小丸
0
1,000m
(国土地理院1/2.5万地形図　承認番号　平19東複第142号)

図7　周辺の遺跡（1）

表１　浪江町周辺の遺跡一覧

No.	遺　跡　名	遺跡番号	所　　在　　地	遺 跡 の 概 要
1	**原Ｂ遺跡**	54700123	浪江町大字室原字原	縄文時代の集落跡
2	**朴廹Ｂ遺跡**	54700126	浪江町大字室原字朴廹	縄文時代の集落跡平安時代の木炭窯跡
3	**朴廹Ｃ遺跡**	54700138	浪江町大字室原字朴廹	平安時代の木炭窯跡
4	**東畑遺跡**	54700115	浪江町大字小野田字東畑	近世の区画溝跡
5	後田Ａ遺跡	54700131	浪江町大字田尻字後田	近世の陶器窯跡
6	沢東Ｂ遺跡	54700137	浪江町大字立野字沢東	縄文時代の集落跡中世・近世屋敷跡
7	仲禅寺遺跡	54700134	浪江町大字小野田字仲禅寺	奈良・平安時代の散布地近世の陶器窯跡
8	乱塔前遺跡	54700135	浪江町大字谷津田字乱塔前	縄文時代の集落跡
9	立野館遺跡	54700066	浪江町大字立野字舘東	中世の城館跡
10	林崎遺跡	54700110	浪江町大字立野字林崎・攝待	古墳～平安時代の散布地
11	七社宮遺跡	54700010	浪江町大字室原字七社宮	縄文時代の散布地
12	立野古墳群	54700012	浪江町大字立野字順礼堂	古墳
13	順礼堂遺跡	54700011	浪江町大字立野字順礼堂	縄文・奈良・平安時代の散布地
14	沢海戸遺跡	54700088	浪江町大字立野字沢海戸	縄文時代の散布地
15	鹿畑古墳	54700017	浪江町大字苅宿字鹿畑	古墳
16	室原遺跡	54700090	浪江町大字室原字室原	中世の城館跡
17	加倉古墳群	54700027	浪江町大字加倉字下加倉	縄文時代の散布地古墳
18	下加倉遺跡	54700119	浪江町大字加倉字下加倉	縄文時代の散布地
19	上ノ原遺跡	54700030	浪江町大字川添字北上ノ原	縄文～平安時代の散布地
20	北上ノ原遺跡	54700093	浪江町大字川添字北上ノ原	旧石器時代の散布地
21	南大坂遺跡	54700092	浪江町大字川添字南大坂	縄文～平安時代の散布地
22	東前畑遺跡	54700113	浪江町大字末森字西前田	縄文・古墳～平安時代の散布地
23	神内遺跡	54700114	浪江町大字田尻字神内・谷地田	近世の散布地
24	聖沢遺跡	54700116	浪江町大字田尻字聖沢川添字聖沢	弥生～平安時代の散布地
25	下原遺跡	54700034	浪江町大字小野田字下原	縄文～平安時代の散布地
26	下原古墳群	54700035	浪江町大字小野田字下原	古墳
27	清水遺跡	54700042	浪江町大字小野田字清水	縄文時代の散布地
28	中平遺跡	54700043	浪江町大字大堀字中平	縄文時代の集落跡
29	陶吉郎窯跡	54700097	浪江町大字大堀字後畑	近世の陶器窯跡
30	漆畑遺跡	54700094	浪江町大字大堀字漆畑	縄文時代の散布地
31	小丸城跡	54700046	浪江町大字小丸字出口	中世の城館跡
32	岳堂窯跡	54700095	浪江町大字大堀字後畑	近世の陶器窯跡
33	大堀Ａ遺跡	54700117	浪江町大字大堀字大堀・漆畑	近世の散布地
34	大堀Ｂ遺跡	54700118	浪江町大字大堀字大堀	近世の散布地
35	大堀長井屋窯跡	54700096	浪江町大字大堀字漆畑	近世の陶器窯跡
36	反畑遺跡	54700044	浪江町大字井出字反畑	縄文時代の散布地

などが知られ，踏査により槍先形尖頭器や削器・彫器などが採集されている。いずれも後期旧石器時代の所産で，上総屋敷遺跡から得られた削器・彫器は旧石器時代末期のものと推定されている。

縄文時代の遺跡は数が最も多い。草創期の遺跡としては長身の尖頭器などが出土した南金谷遺跡や北台遺跡が挙げられる。早期の遺跡では，竹島國基が1957年『石器時代第５号』に三戸式類似の沈線文系土器を報告した大平Ａ遺跡をはじめとして，貝殻沈線文土器や絡条体圧痕文土器が多く出土した砂出遺跡などが知られている。前期になると熊川中・上流域や小入野川流域に遺跡数が増えてくる。1984年に発掘調査された上総屋敷遺跡では浮島Ⅰ式期の土坑が検出され，今回発掘調査が行われた上平Ａ遺跡からは大木１式期の集落跡が確認されている。小入野川流域の南澤遺跡からは

前期後～末葉の好資料が得られている。

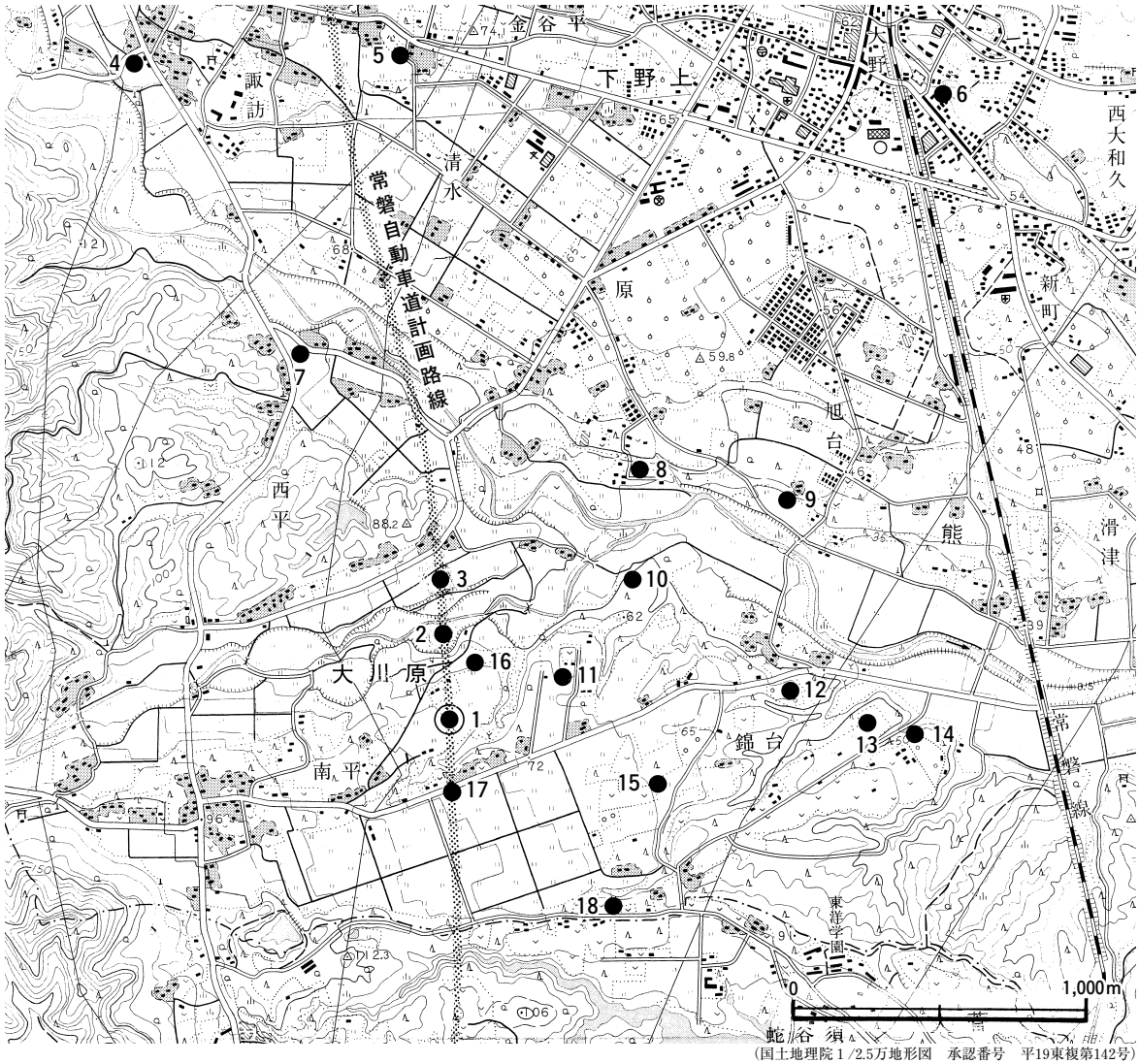
中期も同じく熊川中・上流域や小入野川流域に多く分布している。発掘調査された遺跡はないが，砂出遺跡や蛇保遺跡，南澤遺跡・腰巻遺跡からは中期中葉～末葉そして後期中葉に至るまでの資料が得られている。いずれも大型の土器片が数多く採集されており，集落跡の存在が推定される。縄文時代後～晩期は，小入野川流域においては晩期初頭で資料の所属時期が途絶えるが，熊川流域においては縄文時代晩期終末～弥生時代まで継続する遺跡が確認されている。砂出遺跡や道平遺跡，落合Ｂ遺跡などがそうである。後期は綱取１式から新地式まで，晩期は大洞Ｂ式から大洞Ｃ２式まで継続した後，浮線文系土器が多く出土している。いわゆる大洞Ａ式土器が極端に少なくなる点は東北地方南部の特徴と言えるだろう。

弥生時代の遺跡は比較的少ない。熊川中流域の道平遺跡や落合Ｂ遺跡などは縄文時代から継続した遺跡であるが，弥生時代に新たに出現する遺跡となると松ノ下Ｂ遺跡程度である。小入野川流域では北原・日向遺跡や女狛遺跡などが確認されている。

古墳時代になると，遺跡は熊川下流域や夫澤川流域に分布するようになる。前期に属する女狛遺跡のような集落遺跡の他に，大塚平古墳や蕨平古墳・熊川古墳・鮒澤古墳のような後期古墳が熊川や夫澤川の沖積地を臨む段丘上に立地し，段丘崖には馬具や直刀が出土したことで知られる長者ケ原横穴のような横穴墓群が確認されている。

奈良・平安時代の遺跡については羽山嶽遺跡や下田子橋遺跡，和尚前遺跡などが知られているが，詳細については尚不明である。ただ，熊川下流沖積地には，熊川六丁目条里跡のような条里遺跡が残されており，今後の調査如何によっては，律令期以後の様相が明らかになる可能性もある。

中世以降になると，楢葉氏や標葉氏等の在地武士団の歴史が文書等に記されるようになる。熊川が楢葉郷と標葉郷との境にあたり，佐山館跡などの城館跡も確認されている。後には標葉郷までが相馬氏の治めるところとなり，毎年７月23日・24日に行われる中村神社の神事である相馬野馬追いには騎馬武者が加わっている。この頃の遺跡については知られている数も少ないが，大夫澤遺跡のように中世末期～近世初期に属する蓬莱鏡が出土した遺跡もある。近世後半期になると，18世紀以降浪江町大堀を中心として盛んに行われた陶器窯業が大熊町でも行われるようになり，18世紀後葉の山神窯跡が発掘調査されている。その他，阿武隈高地寄りの山間部では製鉄も行われ，逐一遺跡名を挙げることはできないが，鉄滓が散布している箇所が確認されている。　（髙　林）



（国土地理院１/2.5万地形図　承認番号　平19東複第142号）

No.	遺　跡　名	遺跡番号	所　在　地	遺 跡 の 概 要
1	**上平Ａ遺跡**	54500015	大熊町大字大川原字南平	縄文時代の集落跡
2	上平Ｂ遺跡	54500040	大熊町大字大川原字南平	縄文時代の集落跡
3	道平遺跡	54500014	大熊町大字大川原字西平	縄文時代の集落跡
4	下谷地窯跡	54500009	大熊町大字野上字諏訪	近世の窯跡
5	南金谷遺跡	54500010	大熊町大字下野上字清水	旧石器時代の散布地
6	鮒沢古墳	54500011	大熊町大字下野上字大野	古墳
7	上総屋敷遺跡	54500039	大熊町大字大川原字西平	縄文時代の散布地
8	落合Ｂ遺跡	54500012	大熊町大字熊字旭台	縄文・弥生時代の散布地
9	落合Ａ遺跡	54500013	大熊町大字熊字旭台	縄文時代の散布地
10	松ノ下Ａ遺跡	54500017	大熊町大字熊字錦台	縄文時代の散布地
11	廻谷地遺跡	54500016	大熊町大字大川原字南平	縄文・奈良・平安時代の散布地
12	松ノ下Ｂ遺跡	54500042	大熊町大字熊字錦台	縄文・弥生時代の散布地
13	大平Ａ遺跡	54500019	大熊町大字熊字錦台	縄文時代の散布地
14	大平Ｂ遺跡	54500043	大熊町大字熊字錦台	縄文時代の散布地
15	羽山嶽遺跡	54500018	大熊町大字熊字錦台	弥生時代の散布地
16	南平Ａ遺跡	54500062	大熊町大字大川原字南平	縄文時代の散布地
17	南平Ｂ遺跡	54500063	大熊町大字大川原字南平	近世の散布地
18	蛇保遺跡	54500041	大熊町大字大川原字南平	縄文・古墳時代の散布地

図８　周辺の遺跡（２）

第１編　原（はら）Ｂ遺跡

遺跡略号　ＮＥ―Ｈ・Ｂ
所 在 地　双葉郡浪江町大字室原字原
調査期間　平成18年５月17日～７月28日
調 査 員　阿部　知己・林　紘太郎

第１章　周辺地形と調査経過

第１節　遺跡の位置と周辺地形

原Ｂ遺跡は，浜通り地方中央部の双葉郡内に所在する。行政区分では，双葉郡浪江町大字室原字原に所在し，北緯37°30′12″，東経140°56′35″に位置する。原Ｂ遺跡は，海岸線から約11㎞付近に位置し，ＪＲ浪江駅から西北西に約５㎞，国道114号線を見下ろすことのできる段丘上に位置する。浪江町の西半部は，阿武隈山地東縁部の山地で占められる。阿武隈山地の東縁部，太平洋から西へ約７㎞の地点には，標高100ｍの等高線に沿うように双葉断層が南北に縦走し，山地と河岸段丘地帯の境界をなしている。原Ｂ遺跡は，請戸川南岸の低位面とされる段丘面上に位置し，遺跡の標高は約38ｍである。原Ｂ遺跡の南の中位段丘面上には，縄文時代前・晩期の田子平遺跡が隣接している。

第２節　調　査　経　過

原Ｂ遺跡は，平成８年度に実施された，常磐道自動車道の建設予定地を対象とした表面調査により確認され，その広がりは段丘の北側縁辺部を中心に42,700㎡と提示された(福島県教育委員会1997)。平成17年11月には，常磐自動車道建設用地内の一部2,900㎡を対象に試掘調査が実施され，1,100㎡が保存を要する面積とされた(図１参照。福島県教育委員会2006)。以下に，調査の概要を記す。

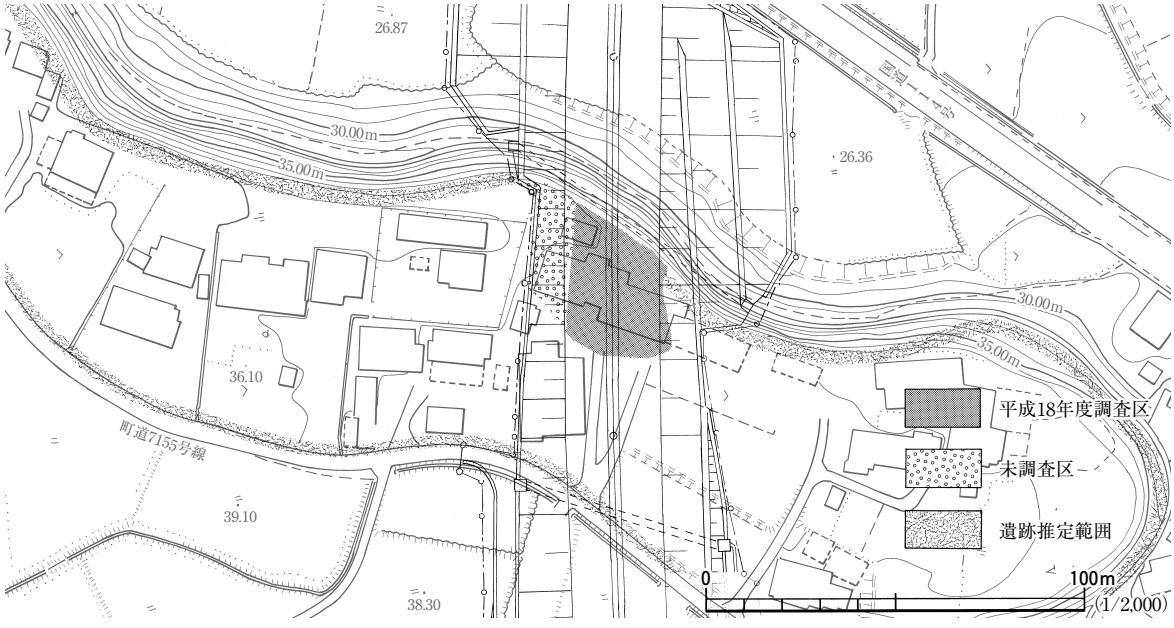


図１　原Ｂ遺跡調査区位置図

平成18年度の調査は，当面１期線の工事範囲とされた予定路線の東半分900㎡を対象として実施した。５月17日には，調査員１名が現地に赴き，調査区の範囲確認や周辺住民への挨拶，そして器材の搬入を実施した。５月22日，重機を導入し表土剥ぎを行う。試掘調査の結果から，表土直下から遺物が出土する知見が得られていたため，表土剥ぎは盛土を含んだ表土を薄く除去した程度で抑えた。５月25日，調査員１名と作業員22名が沢東Ｂ遺跡から移動し，調査員２名で本格的な調査に着手する。調査当初，調査区の北側の段丘縁辺部には，竹が密に生い茂っていたため，作業員により竹の伐採を，遺構の確認作業と併せて実施した。これと前後して，調査区の西縁に沿って，トレンチを設け堆積土層の確認作業を実施したところ，盛土を含む表土下に，黒色砂質土（ＬⅡ），褐色砂質土（ＬⅢ）が堆積し，さらにその下に基盤をなす黄褐色砂質土（ＬⅣ）が堆積していることを確認した。

ＬⅡ・Ⅲ中には遺物が比較的多く包含されていたことから，グリッドごと，堆積土層ごとに掘り込みを実施した。また，各グリッド内において各堆積土層を除去するごとに，遺構の確認作業を実施した。６月中旬には，基盤層である黄褐色砂質土の上面で土坑が確認され始め，遺物包含層の掘り下げとともに，検出遺構の精査を併せて行った。調査の進捗に伴い，土坑は造られているものの，竪穴住居跡がないことが次第に分かってきた。

７月下旬に再度検出作業を実施し，掘り残しが無いことを確認し，７月20日には平成18年度の発掘調査をすべて終了した。７月28日には，福島県教育委員会・財団法人福島県文化振興事業団と東日本高速道路株式会社東北支社いわき工事事務所による現地の終了確認を実施した。後日，調査区については埋め戻しを行い，引き渡した。平成18年度の原Ｂ遺跡の発掘調査で検出した遺構は土坑21基，溝跡２条，遺物包含層約200㎡で，発掘調査に要した日数は延べ21日である。平成18年度に実施した発掘調査面積は900㎡である。

原Ｂ遺跡では，工区西側の２期線の工事範囲とされた予定路線内の200㎡が，発掘調査を実施していない範囲として残されている（図１・２参照）。

第３節　調 査 の 方 法

平成18年度に調査を実施した原Ｂ遺跡では，以下に基づいて行った。

原Ｂ遺跡でのグリッド設定については，世界測地系公共座標に一致させ，一辺５ｍ方眼を単位とした。グリッドの座標値は，図２中に示した。個別のグリッドは，東西方向に西から東へアルファベットＡ・Ｂ…，南北方向に北から南へ算用数字で１・２…とし，両者を組み合わせて，Ｄ６グリッド，Ｆ８グリッドなどと呼称している。

基準線の設定については，遺構の平面図を作成するに際しては，各グリッドを１ｍの方眼に分割し，これを基準線とした。基準線の座標上の位置については，各グリッドの北西端部を原点（Ｅ0，Ｓ０）とし，ここから東へ１ｍ行くごとにＥ１～５，南へ１ｍ行くごとにＳ１～５として表した。

これにそれぞれのグリッド番号を組み合わせて，調査区域内全ての基準線の座標位置を表示した。例えば，Ｆ10－Ｅ２・Ｓ４とは，Ｆ10グリッドの北西端の杭から，東に２ｍ，南に４ｍ離れた場所を示している。

発掘作業については，重機を用いて表土を除去した後，人手により遺物を包含した堆積土層を除去ながら，遺構・遺物の検出作業を行った。遺構の掘り込み作業については，各遺構の形状・大きさ，重複関係に留意して，土層観察用のベルトを設定した。土坑など小型の遺構については，長軸方向にベルトを設定した。遺構内から出土した遺物の取り上げに際しては，上記の区画ごとに，層位を確認した上で取り上げた。

層位名を付す際は，基本層位はローマ数字を用いてＬⅠ・ＬⅡと表した。遺構内堆積土層は，算用数字を用いてℓ１・ℓ２と表した。

調査の記録については，実測図と写真で作成した。遺構図の縮尺は，土坑は１/10で作成した。遺構配置図は１/200で作成した。土層観察における色調判断は，『新版標準土色帖』（小山・竹原1999）を基準とした。調査現場での写真撮影は，６×4.5判の中型一眼レフカメラ，デジタルカメラを併用した。

発掘調査で得られたすべての出土遺物と記録類一式については，報告書作成完了後，遺跡ごとに台帳を作成し，福島県文化財センター白河館（まほろん）に収蔵する予定である。（阿　部）

第２章　遺 構 と 遺 物

第１節　遺構の分布と基本土層

遺構の分布（図２，写真１・２）

原Ｂ遺跡の発掘調査において検出された遺構は，土坑21基，焼土遺構１基，溝跡２条と遺物包含層である。本調査で確認された21基の土坑は，ほとんど重複することなく掘り込まれており，調査区の中央部及び南東側に集まっている傾向が伺えた。21基の土坑のうち，14基が縄文時代早期の土坑で，土坑の平面形は円形・楕円形を呈していた。

また，段丘面北縁に沿った形で，２条の溝跡が並行して南東方向から北西方向へと伸びることが分かった。図３に示した基本土層Ａ－Ａ’とＢ－Ｂ’の堆積状況をみると，溝跡は縄文時代早期の土器を包含した旧表土（ＬⅠｂ）や暗褐色砂質土（ＬⅡ）を掘り込んでいた。このことから，溝跡は縄文時代早期以降に掘り込まれたものと考えている。

基 本 土 層（図３，写真２）

平成18年度に発掘調査を実施した原Ｂ遺跡については，調査区の南側を中心として，宅地や工作による地形改変が及んだため，ＬⅠａの直下には，基盤層である明黄褐色砂質土（ＬⅣ），またはＬⅣへの漸移層である褐色砂質土（ＬⅢ）が堆積した箇所が大半を占めている。

ＬＩは，ａ・ｂの２つに分類した。ＬＩａは盛土で，層中から縄文土器のほか，近・現代の陶磁器片が出土している。下層のＬＩｂは，黒褐色砂質土で，旧表土と判断している。層の厚さは20～50cmで，層中には縄文時代早期の遺物を少なからず包含している。この堆積土は調査区北縁，Ｈ７・８，Ｉ７・８グリッド内でのみ確認できた。

ＬⅡは，暗褐色砂質土で，段丘北縁から15m前後の範囲内で確認できた。層の厚さは約15cmで，土中から縄文時代早期の遺物が少量出土している。調査区の北側には，２条の溝跡がこのＬⅡを掘り込んで東西に延びている。

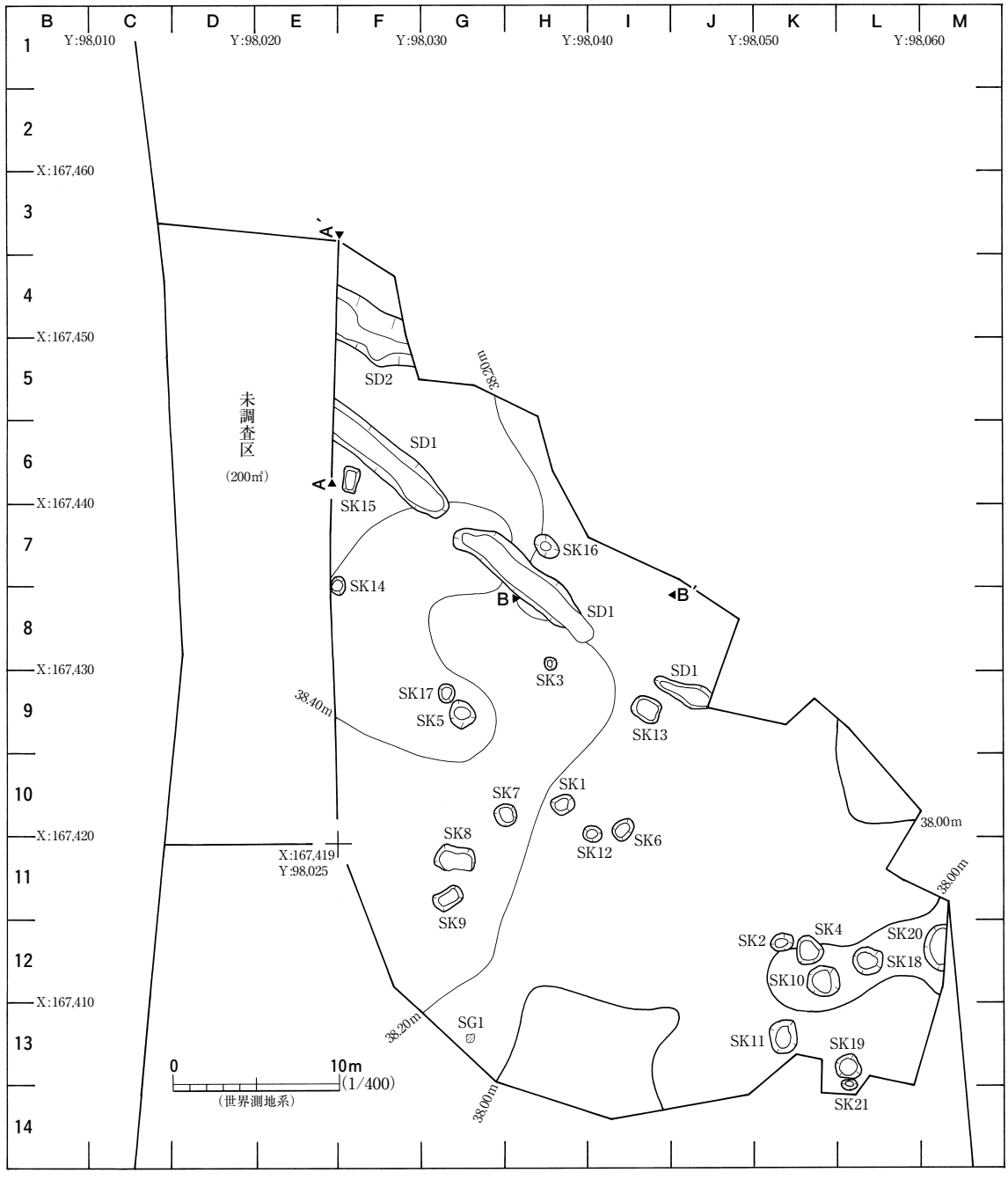


図２　遺構配置図

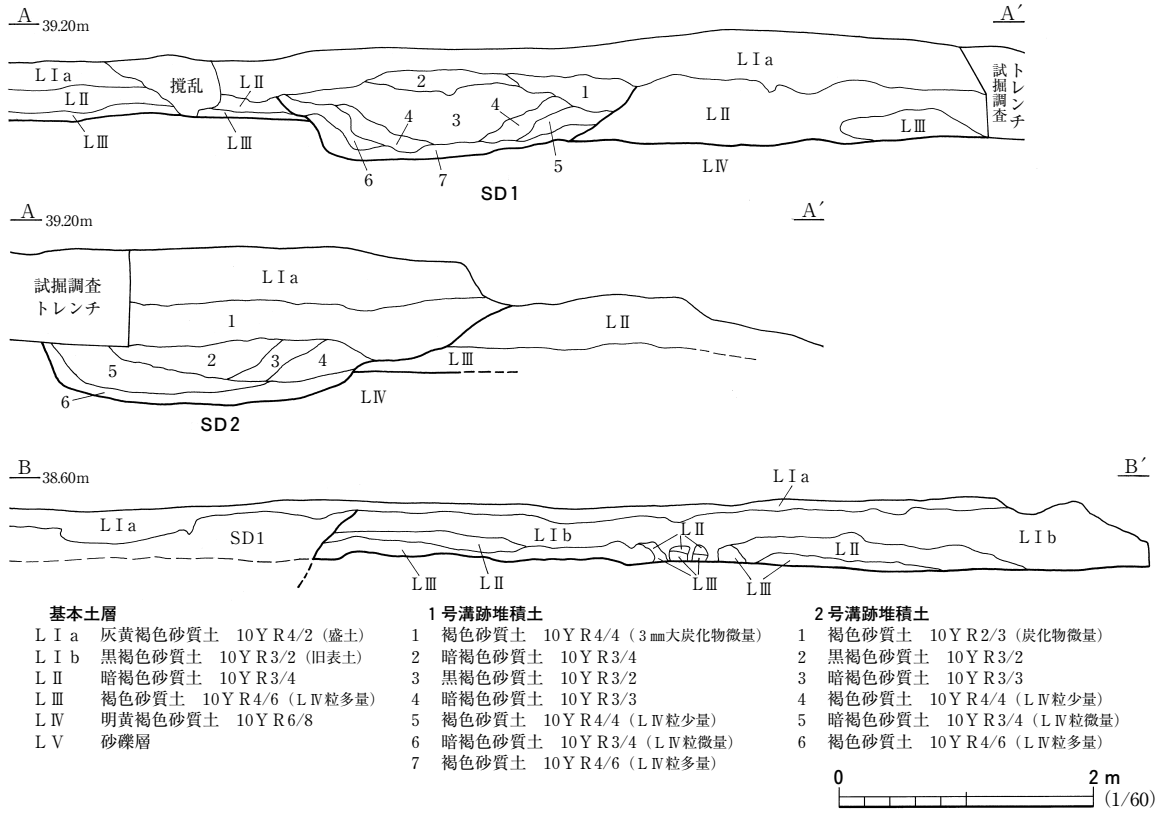


図３　基本土層

ＬⅢは，褐色砂質土で，主に段丘面の北縁付近でわずかに確認できる。ＬⅢは，明黄褐色砂質土（ＬⅣ）への漸移層で，層厚は10～20cmと薄く，土中には縄文時代早期の遺物をわずかに包含している。

ＬⅣは，軟弱な明黄褐色砂質土である。図７右側中央に示した16号土坑の断面図を見ると，検出面からＬⅣを60cmほど掘り下げたところから，この段丘の基盤をなす白色の砂礫層（ＬＶ）の堆積状況を確認した。ＬＶ中には人頭大の花崗岩が少量含まれている。ちなみに，ＬⅣ，ＬＶともに無遺物層である。

第２節　縄文土器の分類

原Ｂ遺跡の発掘調査で出土した縄文土器について，以下のように分類した。また，挿図中には，その分類番号を１点ごとに略表記した。例えば，Ｉ群３類ｂ種土器は「Ｉ３ｂ」のように表記した。

Ｉ群土器…縄文時代早期の土器

１類…日計式押型文土器

２類…無文土器

３類…沈線文系土器群

ａ種…三戸式土器

ｂ種…無文地に単一の沈線で文様を描くもの

ｃ種…無文地に平行沈線で文様を描くもの

ｄ種…無文地に貝殻腹縁圧痕で文様を描くもの

ｅ種…無文地に貝殻腹縁圧痕と平行沈線で文様を描くもの

ｆ種…無文地に押し引き文(「Ｖ」字形の有節沈線)・連続刺突文・短い沈線で文様を描くもの

ｇ種…条痕地に単一の沈線で文様を描くもの

ｈ種…条痕地に平行沈線で文様(連弧・波状文)を描くもの

ｉ種…条痕地に押し引き文(「Ｖ」字形の有節沈線)・連続刺突文・短い沈線で文様を描くもの

ｊ種…常世１式土器

４種…条痕文系土器群

５類…斜縄文を施すもの

６類…１～５類以外の土器

Ⅱ群土器…縄文時代晩期の土器

Ⅲ群土器…上記に含まれない縄文土器　（阿　部）

第３節　土　　坑

原Ｂ遺跡の発掘調査では，21基の土坑を確認した。そのうち14基が縄文時代早期の土坑である。縄文時代早期の土坑は，調査区南東および中央部に比較的集中する傾向が見られる。

１号土坑　ＳＫ１（図４・10，写真３・６）

本遺構は調査区中央のＨ10グリッドに位置し，ＬⅣ上面で検出した。平面形は不整楕円形をなし，規模は長軸141cm，短軸130cm，検出面からの深さは43cmを測る。底面はほぼ平坦であり，周壁の立ち上がりは急である。遺構内堆積土は６層に分けられる。ℓ１・４・５は黄褐色系の土で，周壁の崩落に起因すると考えているＬⅣを少なからず含み，ℓ４～６にはレンズ状の堆積状況も観察されることから，自然堆積土と考えている。

遺物は，ℓ１・３・６中から縄文土器片が14点出土し，その内７点を図10－１～７に示した。１は器面に重層山形押型文を，５は「Ｖ」字形の節を持つ有節沈線と短い沈線で加飾した深鉢形土器胴部片である。２～４は同一個体と思われ，器厚５㎜ほどの薄い尖底深鉢形土器の口縁部片である。２～４の外面には浅くかすかな条痕地上から，２本１単位の沈線で横に区分し，その区画内部に沈線を蛇行させている。６は薄く内外面に条痕文を施し，胎土に繊維混和痕が認めらない。７は口縁端部が短く屈曲し，内外面の加飾が認められず，端部上面には擦痕がある。

本遺構は，出土土器と形態・規模から，縄文時代早期中葉頃の貯蔵穴と考えている。

２号土坑　ＳＫ２（図４・10，写真３・６）

本遺構は調査区南東のＫ12グリッドに位置し，ＬⅣ上面で検出した。平面形は不整楕円形で，規模は長軸148cm，短軸122cm，検出面からの深さは50cmを測る。底面は概ね平坦で，周壁の立ち上がりは急である。遺構内堆積土は４層に分けられる。ℓ１を除いてℓ２～４は黄褐色系の土で，周壁の崩落に起因すると考えているＬⅣを少なからず含むことが確認できることから，自然堆積土と考えている。

遺物はℓ１・３から縄文土器片６点，流紋岩の剥片２点が出土し，その内ℓ１より出土した土器片３点を図10－８～10に示した。８は器面に重層山形押型文を，９は太く短い沈線で矢羽根状に加飾した深鉢形土器胴部片である。10の口縁部片は，端部が内削ぎとなり，器面上部に貝殻腹縁圧痕を，その下位に横位の平行沈線を多重に巡らしている。

本遺構は，出土土器と形態・規模から，縄文時代早期中葉頃の貯蔵穴と考えている。

３号土坑　ＳＫ３（図４，写真３）

本遺構は調査区中央のＨ８グリッドに位置し，ＬⅣ上面で検出した。平面形は不整楕円形で，規模は長軸85cm，短軸72cm，検出面からの深さは34cmを測る。底面は凹凸がみられ，周壁は急な角度で立ち上がる。遺構内堆積土は５層に分けられ，いずれの土質も軟弱であった。ℓ２・４は薄い炭化物層で，間にℓ３を挟む状態で堆積していることから人為的堆積と考えている。炭化物層を確認したが，周壁に熱を受けた痕跡は確認できなかった。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構については，薄い炭化物層をもつ楕円形の土坑であることを確認できたが，機能については不明である。時期については，出土遺物がなく不明である。

４号土坑　ＳＫ４（図４・10，写真３）

本遺構は，調査区南東のＫ12グリッドに位置し，ＬⅣ上面で検出した。平面形は不整円形で，規模は直径182cm，検出面からの深さは62cmを測る。底面は中央部に向かって傾斜しているが，ほぼ平坦である。周壁の立ち上がりは急で，東壁では若干オーバーハングしている。遺構内堆積土は５層に分けられる。ℓ１には微量の炭化物の混入が認められる。ℓ２は黄褐色系の土で，周壁の崩落に起因すると考えているＬⅣを少なからず含み，ℓ１～５にはレンズ状の堆積状況も観察されることから，自然堆積土と考えている。

遺物は，ℓ１・３から縄文土器片24点，流紋岩の剥片11点が出土した。ℓ１中からの遺物出土が大半を占めている。出土遺物のうち９点の深鉢形土器片を図10－11～14・16～19に示した。11は器面が摩滅し判読しにくいが，端部に刻みのある口縁部片で，半截竹管状の工具による押し引き文と沈線で加飾している。12は横位の太い沈線と短い沈線，14は斜位の短い沈線で加飾している。13・16は薄手無文土器片で，内外面に横位のミガキが認められ，16の口縁端部は丸く肥厚している。17

はかすかな条痕地の上に沈線文を施している。18・19は内外面に条痕文を施す。

本遺構は，出土土器と形態・規模から，縄文時代早期中葉頃の貯蔵穴と考えている。

５号土坑　ＳＫ５（図５・10，写真３）

本遺構は調査区西のＧ９グリッドに位置し，ＬⅣ上面で検出した。平面形は不整円形で，規模は上端で直径178cm，中端で直径126cm，検出面からの深さは80cmを測る。底面はほぼ平坦である。周壁の立ち上がりは急であり，上部は外側へ緩やかに開く。遺構内堆積土は９層に分けられる。ℓ７～９は，黄褐色または褐色系の土で，周壁の崩落に起因すると考えているＬⅣ粒を含み，レンズ状の堆積状況も観察されることから，自然堆積土と考えている。

遺物は，ℓ３・６から縄文土器片３点が出土し，その内２点の深鉢形土器片を図10－15・20に示した。15の口縁端部は内削ぎで，器面には細く鋭い沈線で直線文様を描いた後，その沈線に挟まれた部分に格子目を描き埋めている。20は内外面に条痕文を施している。

本遺構は，出土土器と形態・規模から，縄文時代早期中葉頃の貯蔵穴と考えている。

６号土坑　ＳＫ６（図４・10・12，写真３）

本遺構は調査区中央のＩ10・11グリッドにまたがって位置し，ＬⅣ上面で検出した。本遺構の北東側の一部は撹乱によって壊されている。平面形は不整楕円形であり，規模は長軸134cm，短軸118cm，検出面からの深さは34cmを測る。底面はほぼ平坦であり，周壁の立ち上がりは急である。遺構内堆積土は４層に分けられる。ℓ１～４は黄褐色または褐色系の土で，周壁の崩落に起因するＬⅣ粒の混入が確認されていることから，自然堆積土と考えている。

遺物は，ℓ１・３から縄文土器片１点，石器１点が出土した。図10－21の深鉢形土器胴部片は，浅くかすかな条痕地の上に縦方向の沈線文を描く。図12－１はℓ３から２次加工のある硬質頁岩の剥片である。

本遺構は，出土土器と形態・規模から，縄文時代早期中葉頃の貯蔵穴と考えている。

７号土坑　ＳＫ７（図５・11，写真３）

本遺構は，調査区中央のＧ10・Ｈ10グリッドにまたがって位置し，ＬⅣ上面で検出した。平面形は不整円形で，規模は直径141cm，検出面からの深さは33cmを測る。底面は中央に浅い窪みをもつものの，ほぼ平坦である。周壁の立ち上がりは急である。遺構内堆積土は５層に分けられる。ℓ４・５は底面から４～８cmの高さで盛られた層と考えている。ℓ１の黒褐色系の土を中心に，その周囲を取り囲むように暗褐色のℓ３が堆積する状況から，人為的に埋め戻された層の可能性が高いと考えている。

遺物は，すべてℓ１から陶器椀・水差し片各１点，窯道具１点，鉄滓１点が出土した。このうち，陶器椀と窯道具を図11－35・36に示した。35は施釉されていない素焼きの陶器椀の破片であ

る。36は窯道具であるトチンの下部片で，上部は欠損している。

本遺構は，円形の土坑であることだけが確認されたが，機能については不明である。出土遺物については，原Ｂ遺跡の近辺からは近世の陶器窯跡は確認されていないため，何処の窯跡からなぜ素焼きの陶器や窯道具が持ち込まれたかは不明である。時期については，出土遺物から近世頃と考えている。

８号土坑　ＳＫ８（図５・10，写真３）

本遺構は調査区西のＧ11グリッドに位置し，ＬⅣ上面で検出した。本遺構の南・北東側のほとんどが撹乱により壊されている。平面形は不整楕円形で，規模は長軸249cm，短軸190cm，検出面からの深さは９cmを測る。底面はほぼ平坦で，周壁は緩やかに立ち上がる。遺構内堆積土は，２層に分けられ壁際からの流れ込みが認められることから，自然堆積土と考えている。本遺構内からは小穴（Ｐ１～３）を３基確認した。Ｐ１・３は北・西壁際に，Ｐ２は底面中央に位置する。３個の小穴の平面形は不整楕円形，規模は長軸30～44cm，短軸21～30cm，底面からの深さは10～20cmである。

遺物は，ℓ２から縄文土器片30点が出土した。そのうち29片は同一個体の破片で，図10－32・33に図示した。32は深鉢形土器の口縁部片で，かすかな条痕地に重ねて，先の平らなヘラ状工具で横位に押引いた文様を多段に構成している。33は口縁部と底部先端部分を欠損した尖底深鉢形土器の破片で，32とは別個体である。33の外面には条痕地に重ねて，胴部に，先の平らなヘラ状工具を用いて「[」字状の押し引き文様帯と，その下位に２本１組の沈線を菱形状の文様を配した文様帯を，交互に繰り返し加飾している。

本遺構は，３個の小穴を伴った大型の土坑であることが確認されたが，機能については不明である。時期については，出土遺物から縄文時代早期中葉頃と考えている。

９号土坑　ＳＫ９（図６・12，写真４）

本遺構は調査区西のＧ11グリッドに位置し，ＬⅣ上面で検出した。平面形は不整な隅丸長方形で，規模は上端で長軸176cm，短軸133cm，検出面からの深さは88cmを測る。底面はほぼ平坦である。周壁は，ほぼ垂直に立ち上がり，上部は外側へ開いている。遺構内堆積土は９層に分けられる。ℓ１～３・５は，ＬⅣ粒と炭化物とともに陶器片が一緒に混入し，本遺構を廃棄する際に埋め戻された土と考えている。

遺物はℓ１・２・３・５から縄文土器片，陶器片，砥石片が出土した。主にℓ５中から，縄文土器細片２点，陶器椀・土瓶・擂鉢・卸板などの陶器小片計25点が出土した。土器はいずれも小破片のため図化していない，図12－２に角閃岩製の砥石片を図化した。

本遺構は，隅丸長方形の土坑であることだけが確認できたが，機能については不明である。時期については，出土遺物から近代頃と考えている。

10号土坑　ＳＫ10（図６・10，写真４・６）

本遺構は調査区南東のＫ12・Ｌ12グリッドにまたがって位置し，ＬⅣ上面で検出した。平面形は不整楕円形で，規模は上端で長軸214cm，短軸186cm，検出面からの深さは44cmを測る。底面はほぼ平坦であり，周壁の立ち上がりは急である。遺構内堆積土は５層に分けられる。ℓ２～５は黄褐色または褐色系の土で，周壁の崩落に起因するＬⅣ粒の混入が確認され，レンズ状の堆積状況が確認できることから，自然堆積土と考えている。

遺物は，ℓ１・２・３・５から縄文土器片22点出土し，ℓ２・３からの出土量が半数を占める。このうち６点の深鉢形土器胴部片を図10－22～27に示した。22は浅くかすかな条痕地の上に平行沈線を重ねている。23は器面にかすかな条痕地のみ認められるが，22と同様に沈線文を施したと考えている。24は内削ぎの口縁端部で，上部に細く浅い沈線で格子目を描き，その下に斜線を描いている。25は薄手無文土器の胴部片で，内外面とも丁寧にナデた後，斜位にミガキを施す。内面には縦方向に擦痕が認められる。26の波状口縁部片は，かすかな条痕地に重ねて深い沈線で斜位の沈線文を，端部に短い沈線で加飾している。27は沈線で曲線図形を描き，短い沈線と幅の狭い平らな工具で「[」字状の押し引き文を充填している。

本遺構は，出土土器と形態・規模から，縄文時代早期中葉頃の貯蔵穴と考えている。

11号土坑　ＳＫ11（図６・10・12，写真４）

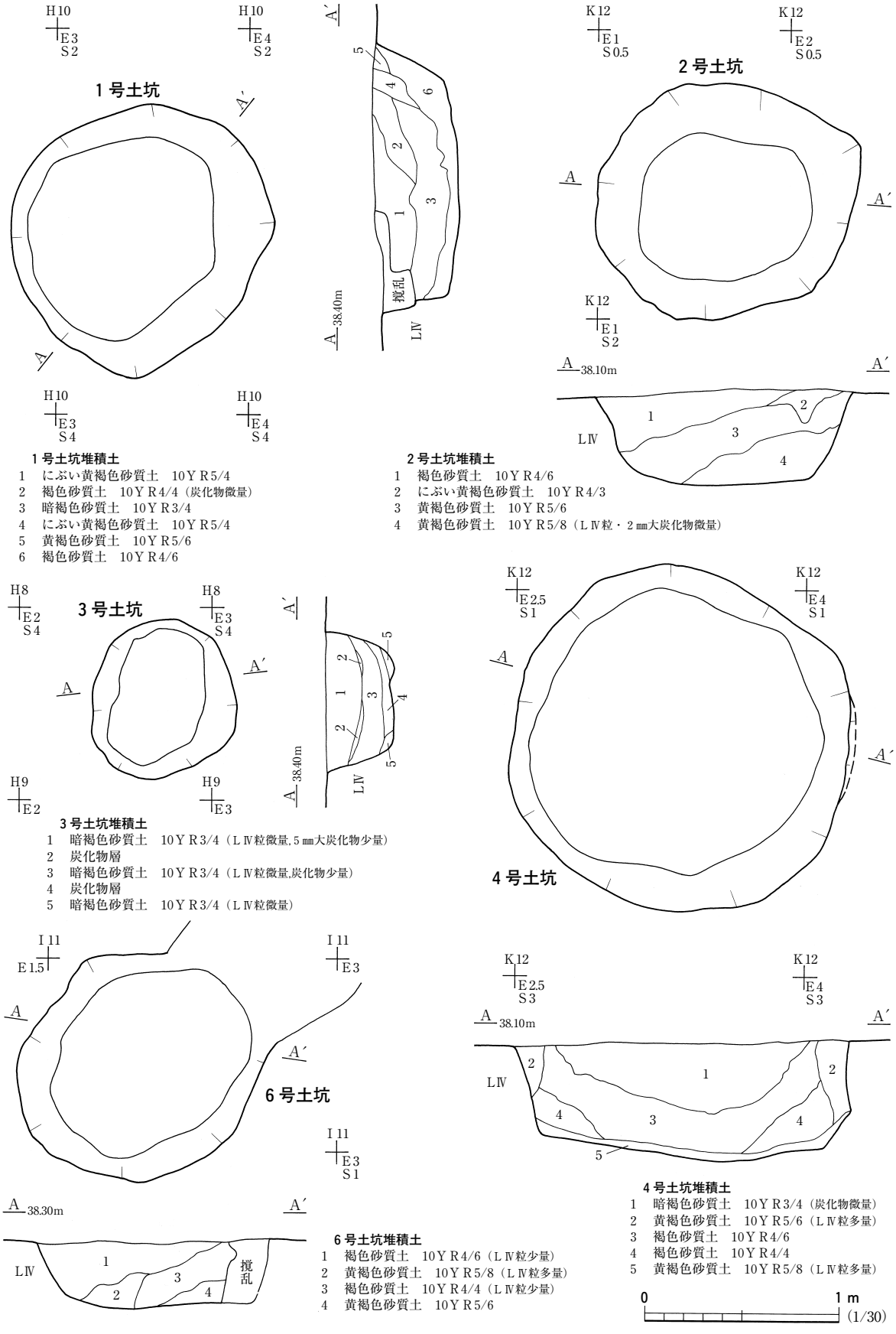
本遺構は調査区南東のＫ13グリッドに位置し，ＬⅣ上面で検出した。平面形は不整円形で，規模は直径203cm，検出面からの深さは65cmを測る。底面はほぼ平坦である。周壁は，南側でほぼ垂直に近い角度で，北側は急な角度で立ち上がっている。遺構内堆積土は６層に分けられる。ℓ６・７は，黄褐色系の土で，周壁の崩落に起因するＬⅣ粒が混入し，いずれの層にもレンズ状の堆積状況が確認できることから，自然堆積土と考えている。

遺物は，ℓ１・４・５・７から縄文土器片26点，石器１点が出土し，ℓ５からの出土が多い。このうち，４点の深鉢形土器片を図10－28～31に，石器を図12－３に示した。図10－29・31の口縁部片は，器厚約４㎜で，内外面に条痕文を施す。同図29の端部には絡条体圧痕で，同図31の端部にはヘラ状工具で押し引いて加飾している。同図28は細く深い沈線と狭い平らな工具による押し引き文を組み合わせて加飾している。同図30は太い沈線とで沈線文を描き，その沈線に囲まれた部分に貝殻腹縁圧痕を充填している。図12－３は流紋岩製の石鏃未成品で，基部に欠損が見られる。

本遺構は，出土土器と形態・規模から，縄文時代早期中葉頃の貯蔵穴と考えている。

12号土坑　ＳＫ12（図５，写真４）

本遺構は調査区中央のＨ10・11，Ｉ10・11グリッドにまたがって位置し，ＬⅣ上面で検出した。平面形は不整楕円形で，規模は長軸118cm，短軸93cm，検出面からの深さは15cmを測る。底面はわ



1 号土坑堆積土

1　にぶい黄褐色砂質土　10ＹＲ5/4
2　褐色砂質土　10ＹＲ4/4（炭化物微量）
3　暗褐色砂質土　10ＹＲ3/4
4　にぶい黄褐色砂質土　10ＹＲ5/4
5　黄褐色砂質土　10ＹＲ5/6
6　褐色砂質土　10ＹＲ4/6

2 号土坑堆積土

1　褐色砂質土　10ＹＲ4/6
2　にぶい黄褐色砂質土　10ＹＲ4/3
3　黄褐色砂質土　10ＹＲ5/6
4　黄褐色砂質土　10ＹＲ5/8（ＬⅣ粒・２㎜大炭化物微量）

3 号土坑堆積土

1　暗褐色砂質土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒微量，５㎜大炭化物少量）
2　炭化物層
3　暗褐色砂質土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒微量，炭化物少量）
4　炭化物層
5　暗褐色砂質土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒微量）

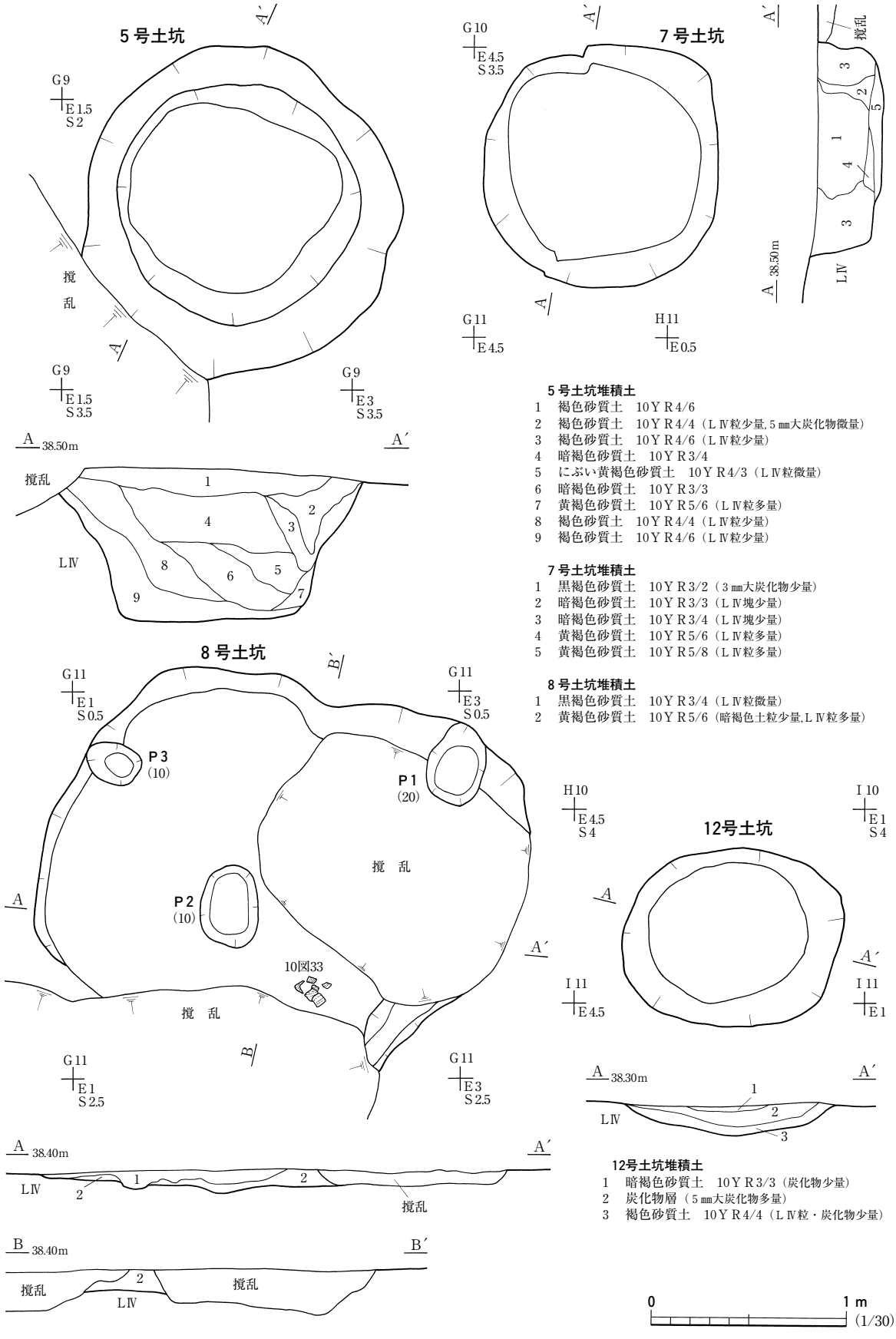
4 号土坑堆積土

1　暗褐色砂質土　10ＹＲ3/4（炭化物微量）
2　黄褐色砂質土　10ＹＲ5/6（ＬⅣ粒多量）
3　褐色砂質土　10ＹＲ4/6
4　褐色砂質土　10ＹＲ4/4
5　黄褐色砂質土　10ＹＲ5/8（ＬⅣ粒多量）

6 号土坑堆積土

1　褐色砂質土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ粒少量）
2　黄褐色砂質土　10ＹＲ5/8（ＬⅣ粒多量）
3　褐色砂質土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒少量）
4　黄褐色砂質土　10ＹＲ5/6

図４　１～４・６号土坑



5号土坑堆積土

1　褐色砂質土　10ＹＲ4/6
2　褐色砂質土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒少量,５㎜大炭化物微量）
3　褐色砂質土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ粒少量）
4　暗褐色砂質土　10ＹＲ3/4
5　にぶい黄褐色砂質土　10ＹＲ4/3（ＬⅣ粒微量）
6　暗褐色砂質土　10ＹＲ3/3
7　黄褐色砂質土　10ＹＲ5/6（ＬⅣ粒多量）
8　褐色砂質土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒少量）
9　褐色砂質土　10ＹＲ4/6（ＬⅣ粒少量）

7号土坑堆積土

1　黒褐色砂質土　10ＹＲ3/2（３㎜大炭化物少量）
2　暗褐色砂質土　10ＹＲ3/3（ＬⅣ塊少量）
3　暗褐色砂質土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ塊少量）
4　黄褐色砂質土　10ＹＲ5/6（ＬⅣ粒多量）
5　黄褐色砂質土　10ＹＲ5/8（ＬⅣ粒多量）

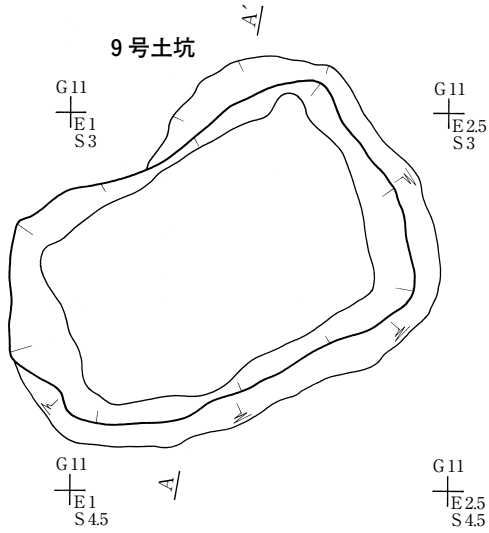
8号土坑堆積土

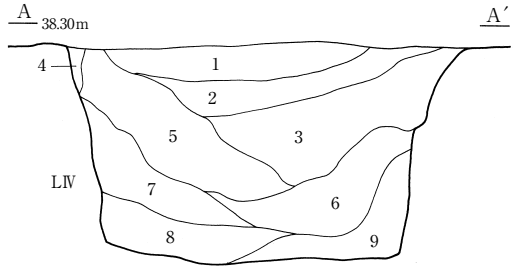
1　黒褐色砂質土　10ＹＲ3/4（ＬⅣ粒微量）
2　黄褐色砂質土　10ＹＲ5/6（暗褐色土粒少量,ＬⅣ粒多量）

12号土坑堆積土

1　暗褐色砂質土　10ＹＲ3/3（炭化物少量）
2　炭化物層（５㎜大炭化物多量）
3　褐色砂質土　10ＹＲ4/4（ＬⅣ粒・炭化物少量）

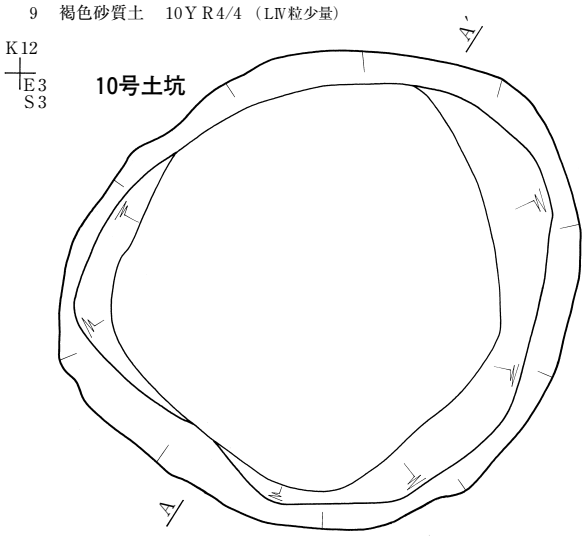
図５　５・７・８・12号土坑

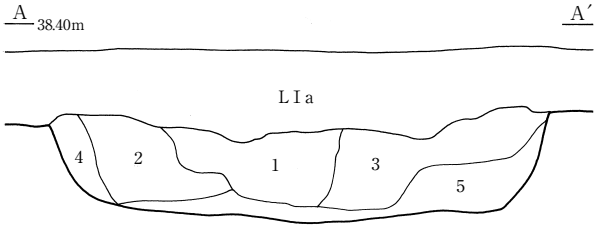




9号土坑堆積土

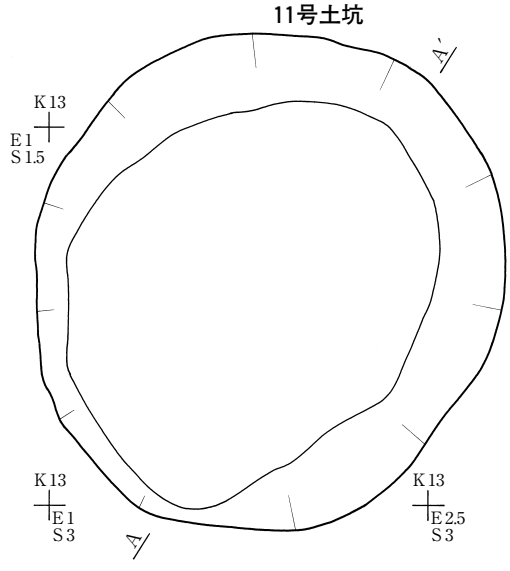
1　褐色砂質土　10ＹＲ4/4（炭化物微量）
2　褐色砂質土　10ＹＲ4/6（５㎜大炭化物微量,５㎜大LⅣ粒少量）
3　暗褐色砂質土　10ＹＲ3/4（５㎜大炭化物少量）
4　褐色砂質土　10ＹＲ4/6（LⅣ塊少量）
5　褐色砂質土　10ＹＲ4/6（５㎜大炭化物微量,LⅣ粒少量）
6　暗褐色砂質土　10ＹＲ3/3
7　にぶい黄褐色砂質土　10ＹＲ4/3（LⅣ粒少量）
8　暗褐色砂質土　10ＹＲ3/3
9　褐色砂質土　10ＹＲ4/4（LⅣ粒少量）

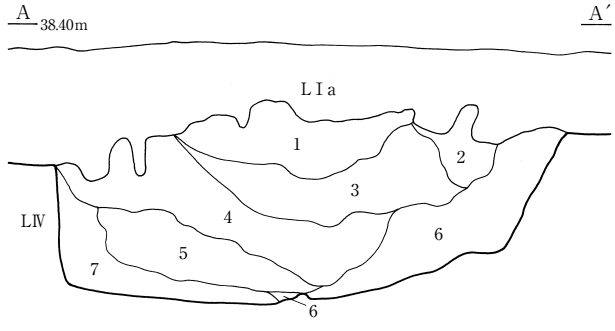




10号土坑堆積土

1　暗褐色砂質土　10ＹＲ3/3
2　褐色砂質土　10ＹＲ4/4（LⅣ粒少量）
3　黄褐色砂質土　10ＹＲ5/6（LⅣ粒多量）
4　黄褐色砂質土　10ＹＲ5/6
5　褐色砂質土　10ＹＲ4/4（LⅣ粒少量）





11号土坑堆積土

1　暗褐色砂質土　10ＹＲ3/3
2　黄褐色砂質土　10ＹＲ4/6
3　褐色砂質土　10ＹＲ4/4（５㎜大炭化物微量）
4　褐色砂質土　10ＹＲ4/6（LⅣ粒少量）
5　暗褐色砂質土　10ＹＲ3/3
6　黄褐色砂質土　10ＹＲ5/8（LⅣ粒多量）
7　黄褐色砂質土　10ＹＲ5/6（褐色土粒少量,LⅣ粒多量）

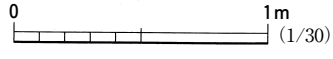


図６　９～11号土坑

ずかに凹凸がみられ，浅い窪みをなす。遺構内堆積土は３層に分けられる。ℓ２は層厚３cm程の細かい炭の層で，その直下のℓ３上面の窪み具合に沿うように堆積していた。ℓ３の上面には熱を受けた痕跡を確認できなかったが，人為的に埋め戻し底面とした可能性を考えている。
本遺構からの出土遺物は認められなかった。

本遺構は，楕円形の浅い土坑であることだけ確認できた。炭化物層（ℓ２）の由来については，ℓ３上面に熱を受けた痕跡を確認できなかったことから，土坑内で焼成されたものか，土坑内に投棄したものかを特定できなかった。時期については，出土遺物がなく不明である。

13号土坑　ＳＫ13（図７・11・12，写真４・６）

本遺構は調査区中央のＩ９グリッドに位置し，ＬⅣ上面で検出した。平面形は不整な隅丸長方形で，規模は長軸175cm，短軸128cm，検出面からの深さは51cmを測る。底面はほぼ平坦である。周壁の立ち上がりは急で，底面から約20cmの高さまでオーバーハングしている。遺構内堆積土は９層に分けられる。堆積土の南側は試掘調査時のトレンチにより壊されている。ℓ８以外の堆積土は褐色系の土で，基本的にレンズ状の堆積が確認できることから，自然堆積土と考えている。

遺物は，ℓ１・６・８から縄文土器片48点，石器８点出土し，ℓ１からの出土量が大半を占める。このうち19点の深鉢形土器胴部片を図11－１～19に，３点の石器を図12－４～６に示した。図11－１・７は重層山形押型文を地文とし，同図１には地文上から横位に沈線を加えている。同図２は薄手無文土器の口縁部片で，端部に平坦面を形作っている。同図３・４は地文に貝殻腹縁文を施している。同図10・12・15の器面には，平行沈線と「Ｖ」字形の節をもつ有節沈線，それらに沿わせるように短い沈線を組み合わせて加飾している。同図10・15の地文には浅くかすかな条痕も確認できる。同図６・13は平行沈線と短い沈線を沿わせ文様を描いている。同図６の薄手の尖底深鉢形土器片は，かすかな条痕文を地文として施す。同図８・14の口縁部片は，沈線と連続刺突文を組み合わせて文様を描く。同図５・９・11は平行沈線で文様を描き，５の沈線施文時に削れた粘土が小さいボタン状になって貼り付いている。同図16～19は判別しにくいが，縄文を地文としている。図12－４は基部に欠損が見られる流紋岩製の石鏃，図12－５は完成形態不明な石鏃未成品である。図12－６は流紋岩の剥片で，剥片末端に細かい剥離が入る。

本遺構は，出土土器と形態・規模から，縄文時代早期中葉頃の貯蔵穴と考えている。

14号土坑　ＳＫ14（図７，写真４）

本遺構は調査区北西のＥ７・８グリッドに位置し，ＬⅢ下面からＬⅣ上面で検出した。平面形は不整円形で，規模は直径133cm，検出面からの深さは41cmを測る。底面はほぼ平坦であるが，中央に低い高まりをもつ。周壁の立ち上がりは急であり，北側では外側へわずかに反っている。遺構内堆積土は４層に分けられる。ℓ４は，ＬⅣを２～６cm程の高さで人為的に盛られている。ℓ１～３は暗褐色を主体とする堆積土で，炭化物などの混入も観察できることから，本遺構を廃棄する際に

埋め戻した土と考えている。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は底面の盛り上がった円形の土坑ということが確認されたが，機能については不明である。時期についても，出土遺物が無かったことから不明である。

15号土坑　ＳＫ15（図７，写真４）

本遺構は調査区北西のＦ６グリッドに位置し，ＬⅣ上面で検出した。平面形は隅丸長方形で，規模は長軸141cm，短軸92cm，検出面からの深さは35cmを測る。底面はほぼ平坦で，周壁の立ち上がりは急で，南・西壁の一部には熱を受けた痕跡を確認した。遺構内堆積土は５層に分けられ，いずれの土質も軟らかかった。ℓ４には多量の細かな木炭粒が確認され，ℓ２・３には少量の炭化物や焼土粒が混入している。レンズ状の堆積が認められることから，自然堆積土と考えている。

本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は，壁面の一部が熱を受け焼土化していることから，木炭を焼成した土坑と考えている。時期については，遺物が出土していないため不明である。

16号土坑　ＳＫ16（図７・11，写真４）

本遺構は調査区北のＨ７グリッドに位置し，ＬⅣ上面で検出した。平面形は不整楕円形で，規模は長軸150cm，短軸120cm，検出面からの深さは109cmを測る。底面は，礫層であるＬＶを50cmほど掘り込んでおり，中央に向かってわずかに傾斜している。周壁はオーバーハングして立ち上がっている。遺構内堆積土は７層に分けられる。ℓ５～７は花崗岩の混入が見られ，ＬＶにあたる壁の崩落に起因する堆積土であることから自然堆積土と考えている。

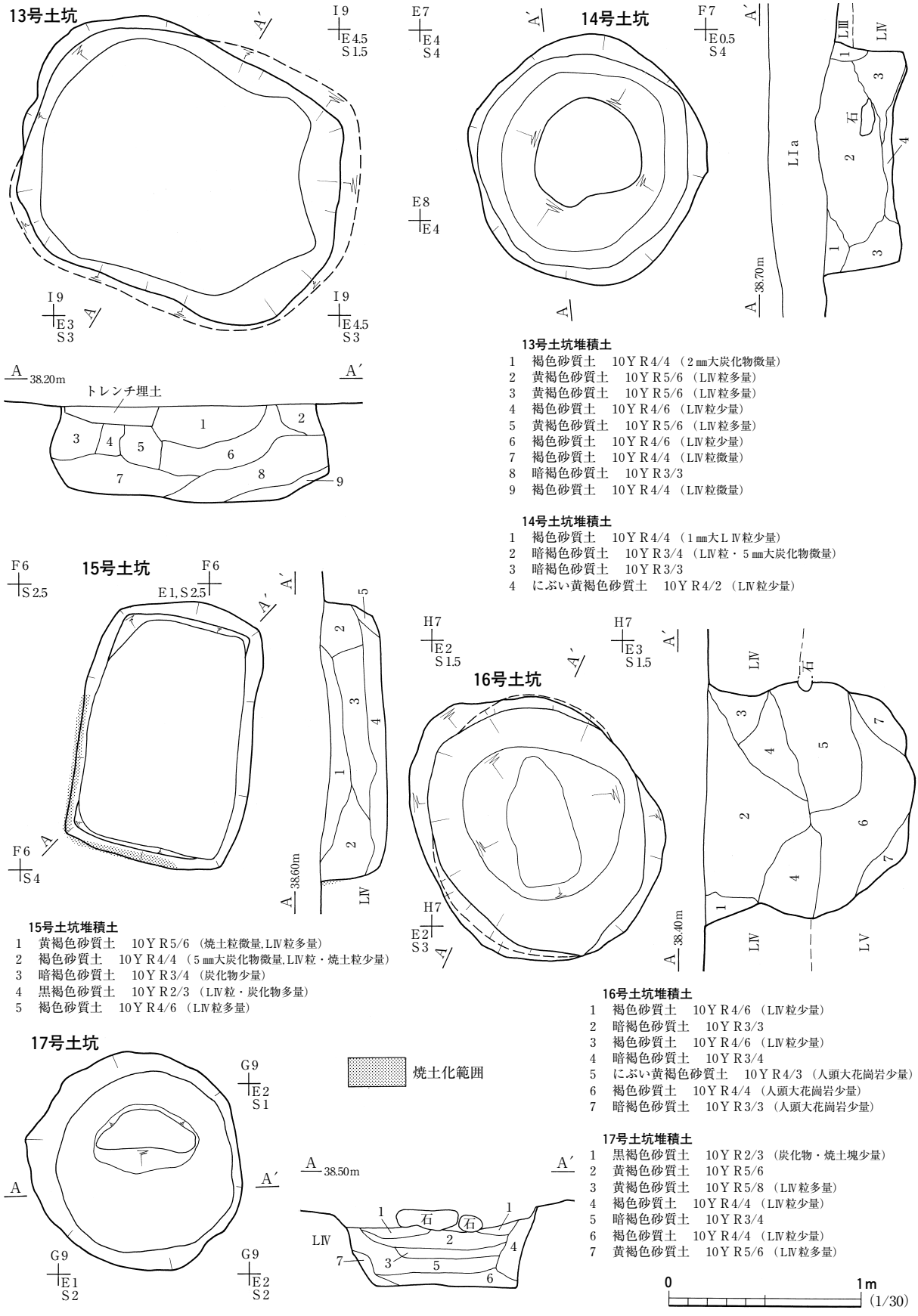
遺物は，ℓ１・６から各２点ずつ縄文土器片が出土した。その内２点の深鉢形土器胴部片を図11－24・25に示した。24は平行沈線と「Ｖ」字形の節を持つ有節沈線を組み合わせて加飾している。25は薄手の無文土器片で，内外面に丁寧なナデを施している。

本遺構は，出土土器と形態・規模から，縄文時代早期中葉頃の貯蔵穴と考えている。

17号土坑　ＳＫ17（図７，写真５）

本遺構は調査区西のＧ９グリッドに位置し，ＬⅣ上面で検出した。平面形は不整円形であり，規模は直径109cm，検出面からの深さは29cmを測る。底面の中央には低い高まりがみられるが，調査時に南側半分を掘り過ぎてしまい，図７左下平面図には半円状に図化している。周壁の立ち上がりは急である。遺構内堆積土は７層に分けられる。ℓ６・７は底面にＬⅣを６cm程の高さで人為的に盛られた土と考えている。ℓ１・２・３・５の堆積土は，ℓ４の内側に水平に堆積していることから人為的に埋め戻された層の可能性が高いと考えている。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は，ＳＫ13と同様の形態をもつ，底面の盛り上がった円形の土坑ということが確認されたが，機能については不明である。時期についても，出土遺物が無かったため不明である。



13号土坑堆積土

1　褐色砂質土　10ＹＲ4/4（2㎜大炭化物微量）
2　黄褐色砂質土　10ＹＲ5/6（LⅣ粒多量）
3　黄褐色砂質土　10ＹＲ5/6（LⅣ粒多量）
4　褐色砂質土　10ＹＲ4/6（LⅣ粒少量）
5　黄褐色砂質土　10ＹＲ5/6（LⅣ粒多量）
6　褐色砂質土　10ＹＲ4/6（LⅣ粒少量）
7　褐色砂質土　10ＹＲ4/4（LⅣ粒微量）
8　暗褐色砂質土　10ＹＲ3/3
9　褐色砂質土　10ＹＲ4/4（LⅣ粒微量）

14号土坑堆積土

1　褐色砂質土　10ＹＲ4/4（1㎜大ＬⅣ粒少量）
2　暗褐色砂質土　10ＹＲ3/4（LⅣ粒・5㎜大炭化物微量）
3　暗褐色砂質土　10ＹＲ3/3
4　にぶい黄褐色砂質土　10ＹＲ4/2（LⅣ粒少量）

15号土坑堆積土

1　黄褐色砂質土　10ＹＲ5/6（焼土粒微量,LⅣ粒多量）
2　褐色砂質土　10ＹＲ4/4（5㎜大炭化物微量,LⅣ粒・焼土粒少量）
3　暗褐色砂質土　10ＹＲ3/4（炭化物少量）
4　黒褐色砂質土　10ＹＲ2/3（LⅣ粒・炭化物多量）
5　褐色砂質土　10ＹＲ4/6（LⅣ粒多量）

16号土坑堆積土

1　褐色砂質土　10ＹＲ4/6（LⅣ粒少量）
2　暗褐色砂質土　10ＹＲ3/3
3　褐色砂質土　10ＹＲ4/6（LⅣ粒少量）
4　暗褐色砂質土　10ＹＲ3/4
5　にぶい黄褐色砂質土　10ＹＲ4/3（人頭大花崗岩少量）
6　褐色砂質土　10ＹＲ4/4（人頭大花崗岩少量）
7　暗褐色砂質土　10ＹＲ3/3（人頭大花崗岩少量）

17号土坑堆積土

1　黒褐色砂質土　10ＹＲ2/3（炭化物・焼土塊少量）
2　黄褐色砂質土　10ＹＲ5/6
3　黄褐色砂質土　10ＹＲ5/8（LⅣ粒多量）
4　褐色砂質土　10ＹＲ4/4（LⅣ粒少量）
5　暗褐色砂質土　10ＹＲ3/4
6　褐色砂質土　10ＹＲ4/4（LⅣ粒少量）
7　黄褐色砂質土　10ＹＲ5/6（LⅣ粒多量）

図７　13～17号土坑

18号土坑　ＳＫ18（図８・11，写真５）

本遺構は調査区南東のＬ12グリッドに位置し，ＬⅣ上面で検出した。平面形は不整楕円形で，規模は長軸183cm，短軸118cm，検出面からの深さは60cmを測る。底面はほぼ平坦で，周壁の立ち上がりは急である。周壁の北東及び南西側の一部は調査時に掘り過ぎてしまった。遺構内堆積土は５層に分けられる。いずれも褐色を主体とした層で，周壁の崩落に起因するＬⅣを含んでいることから，自然堆積土と考えている。

遺物は，ℓ１・２・５から縄文土器片５点，流紋岩の剥片１点が出土した。そのうち３点の深鉢形土器胴部片を，図11－26～28に示した。26の口縁部片には貝殻腹縁文を，27には斜位の沈線に貝殻腹縁文を沿わせて文様を描いている。28は平行沈線を描いている。

本遺構は，出土土器と形態・規模から，縄文時代早期中葉頃の貯蔵穴と考えている。

19号土坑　ＳＫ19（図８・11・12，写真５）

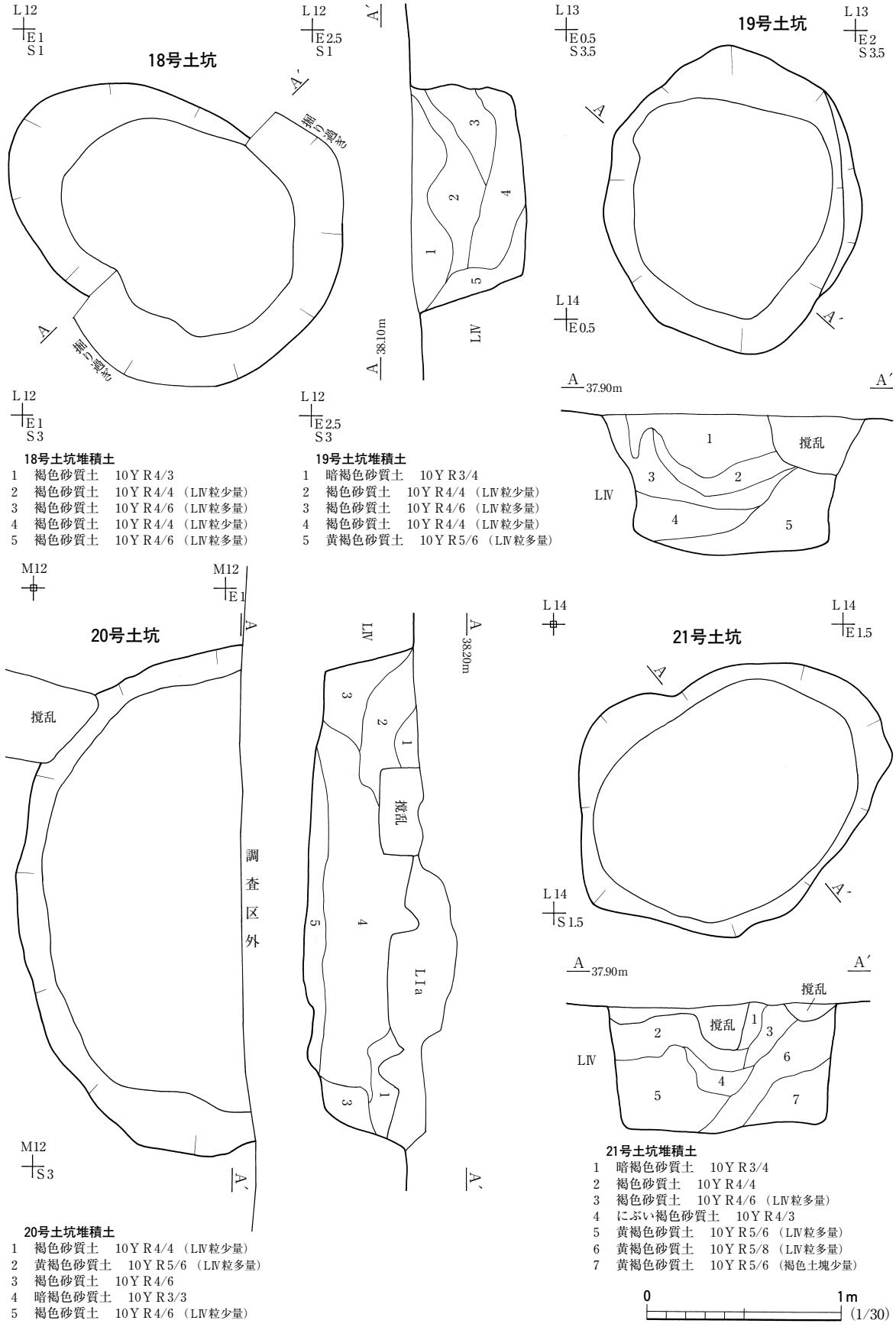
本遺構は調査区南東のＬ13・14グリッドにまたがって位置し，ＬⅣ上面で検出した。平面形は不整楕円形で，規模は長軸163cm，短軸134cm，検出面からの深さは74cmを測る。底面はほぼ平坦であり，周壁の上端付近は崩れて傾斜が緩くなるが，中端以下ではほぼ直立している。遺構内堆積土は５層に分けられる。ℓ２～５は，壁の崩落に起因するＬⅣ粒の混入が顕著で，レンズ状の堆積が観察できることから，自然堆積土と考えている。

遺物は，ℓ１・２・４から縄文土器片20点，石器17点が出土し，主にℓ１・２からの出土が大半を占める。このうち８点の深鉢形土器片を図11－20～23・29～32に示した。図11－21は薄手無文土器の口縁部片で，内面に横位の擦痕が認められる。同図20・22・23は重層山形押型文を地文とし，同図22の口縁部片には地文の上から横位に沈線を，端部には刺突を加えている。同図29・31は平行沈線と貝殻腹縁文を組み合わせ加飾している。同図30の口縁端部は外削ぎ状で，細い沈線で沈線文を描いている。同図32は内外面に条痕がみられる。出土した石器は流紋岩の剥片が大半で，図12－７も含めて４点の珪質頁岩製の剥片も混ざって出土している。図12－７は上部に細かい剥離の入った剥片である。

本遺構は，出土土器と形態・規模から，縄文時代早期中葉頃の貯蔵穴と考えている。

20号土坑　ＳＫ20（図８・11，写真５）

本遺構は調査区南西のM12グリッドに位置し，ＬⅣ上面で検出した。本遺構の東側半分は調査区の外へ延びていることから，西側半分のみの調査となった。本遺構の北壁の一部は撹乱により壊されている。平面形は不整円形と推定され，調査した西側での規模は直径260cm，検出面からの深さは58cmを測る。底面はほぼ平坦である。周壁の立ち上がりは急である。遺構内堆積土は５層に分けられる。遺構内を広く覆うℓ４は暗褐色系の層である。その他の層では周壁の崩落に起因するＬⅣ



18号土坑堆積土
1　褐色砂質土　10ＹＲ4/3
2　褐色砂質土　10ＹＲ4/4（LⅣ粒少量）
3　褐色砂質土　10ＹＲ4/6（LⅣ粒多量）
4　褐色砂質土　10ＹＲ4/4（LⅣ粒少量）
5　褐色砂質土　10ＹＲ4/6（LⅣ粒多量）

19号土坑堆積土
1　暗褐色砂質土　10ＹＲ3/4
2　褐色砂質土　10ＹＲ4/4（LⅣ粒少量）
3　褐色砂質土　10ＹＲ4/6（LⅣ粒多量）
4　褐色砂質土　10ＹＲ4/4（LⅣ粒少量）
5　黄褐色砂質土　10ＹＲ5/6（LⅣ粒多量）

20号土坑堆積土
1　褐色砂質土　10ＹＲ4/4（LⅣ粒少量）
2　黄褐色砂質土　10ＹＲ5/6（LⅣ粒多量）
3　褐色砂質土　10ＹＲ4/6
4　暗褐色砂質土　10ＹＲ3/3
5　褐色砂質土　10ＹＲ4/6（LⅣ粒少量）

21号土坑堆積土
1　暗褐色砂質土　10ＹＲ3/4
2　褐色砂質土　10ＹＲ4/4
3　褐色砂質土　10ＹＲ4/6（LⅣ粒多量）
4　にぶい褐色砂質土　10ＹＲ4/3
5　黄褐色砂質土　10ＹＲ5/6（LⅣ粒多量）
6　黄褐色砂質土　10ＹＲ5/8（LⅣ粒多量）
7　黄褐色砂質土　10ＹＲ5/6（褐色土塊少量）

図８　18～21号土坑

を含んで褐色または黄褐色系の層であることから，自然堆積土と考えている。

遺物は，ℓ４・５から縄文土器片11点出土した。このうち３点の深鉢形土器片を図11－34・37・38に示した。34は器面を帯状に区画し，その中に格子目を沈線で描いている。37は沈線で格子目文と平行沈線を多重に描いている。38は地文として斜縄文を施している。

本遺構は，出土土器と形態・規模から，縄文時代早期中葉頃の貯蔵穴と考えている。

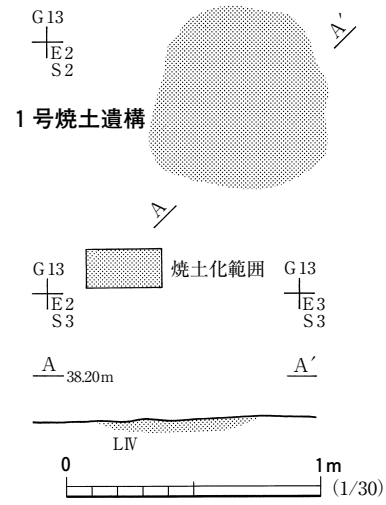


図９　１号焼土遺構

21号土坑　ＳＫ21（図８・11・12，写真５）

本遺構は調査区南東のＬ14グリッドに位置し，ＬⅣ上面で検出した。平面形は不整楕円形で，規模は長軸178cm，短軸140cm，検出面からの深さは67cmを測る。底面はほぼ平坦であり，周壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺構内堆積土は７層に分けられる。ℓ１以外は褐色または黄褐色系の層で，レンズ状の堆積が確認できることから，自然堆積土と考えている。

遺物は，ℓ２・６から縄文土器片３点，流紋岩の剥片２点が出土した。図11－33の深鉢形土器胴部片は，外面はナデ調整，内面に条痕が認められる。図12－８は流紋岩製の縦長剥片である。

本遺構は，出土土器と形態・規模から，縄文時代早期中葉頃の貯蔵穴と考えている。　（林）

第４節　焼　土　遺　構

原Ｂ遺跡の発掘調査では，Ｇ13グリッドから１基の焼土遺構を確認した。

１号焼土遺構　ＳＧ１（図９，写真５）

本遺構は調査区南東のＧ13グリッドに位置し，ＬⅣ上面で検出した。焼土の規模は最大約70cmで，焼土下には掘り方などは確認できなかった。焼土の被熱変色した部位の厚さは，最大４cmである。焼土の周囲からは，小穴などは確認できなかった。

遺構検出及び断面精査時に出土した遺物は，縄文土器細片１点，珪質頁岩の剥片１点である。

本遺構については，屋外炉の可能性を考えている。時期については，わずかな遺物から特定することは難しいが，周囲の遺構も含めて判断すると，縄文時代早期頃と考えている。　（阿　部）

第５節　溝　　跡

原Ｂ遺跡発掘調査では，調査区北側の段丘肩部において２条の溝跡を確認した。いずれも南東か

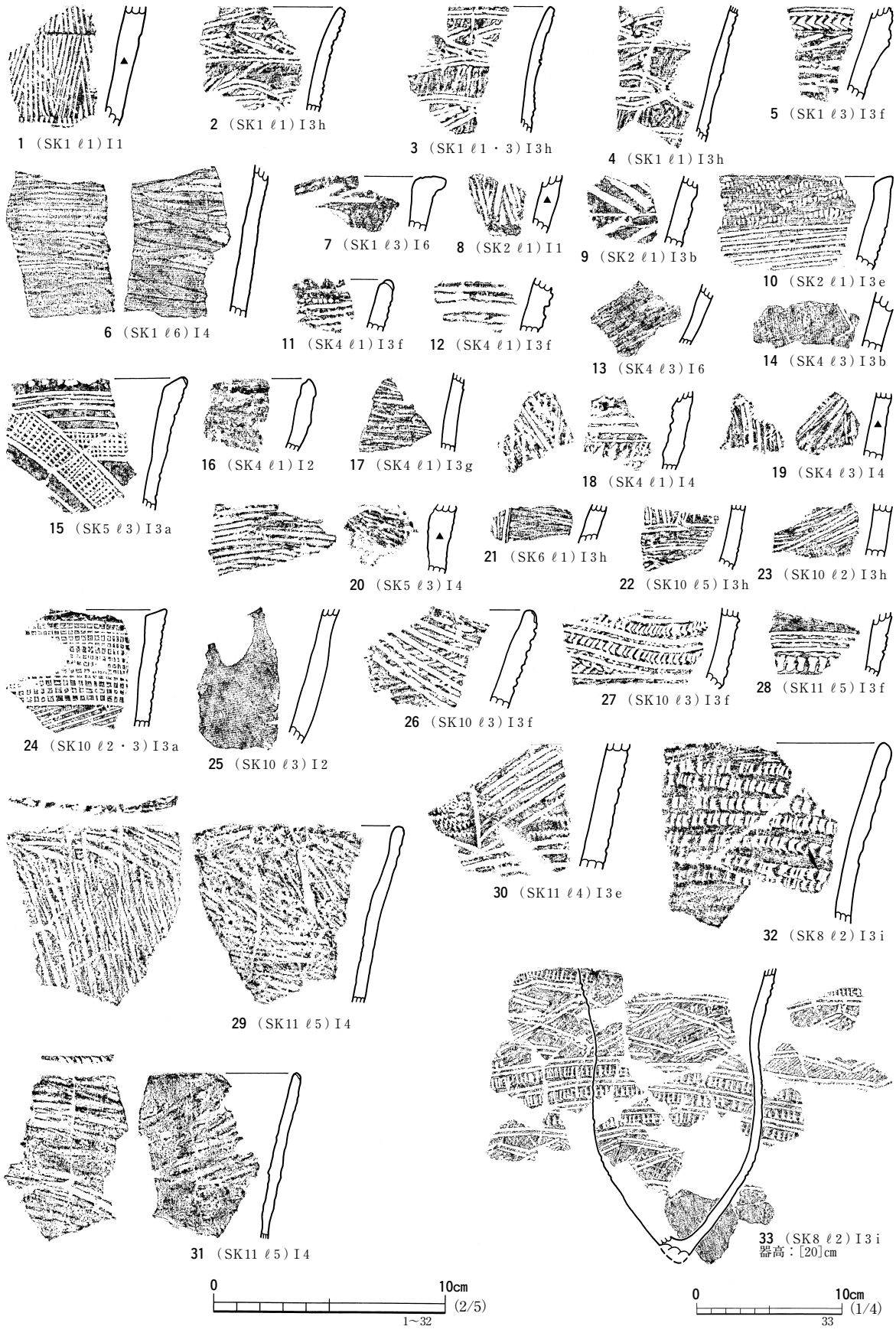

1 (SK1 ℓ1) I1
2 (SK1 ℓ1) I3h
3 (SK1 ℓ1・3) I3h
4 (SK1 ℓ1) I3h
5 (SK1 ℓ3) I3f
6 (SK1 ℓ6) I4
7 (SK1 ℓ3) I6
8 (SK2 ℓ1) I1
9 (SK2 ℓ1) I3b
10 (SK2 ℓ1) I3e
11 (SK4 ℓ1) I3f
12 (SK4 ℓ1) I3f
13 (SK4 ℓ3) I6
14 (SK4 ℓ3) I3b
15 (SK5 ℓ3) I3a
16 (SK4 ℓ1) I2
17 (SK4 ℓ1) I3g
18 (SK4 ℓ1) I4
19 (SK4 ℓ3) I4
20 (SK5 ℓ3) I4
21 (SK6 ℓ1) I3h
22 (SK10 ℓ5) I3h
23 (SK10 ℓ2) I3h
24 (SK10 ℓ2・3) I3a
25 (SK10 ℓ3) I2
26 (SK10 ℓ3) I3f
27 (SK10 ℓ3) I3f
28 (SK11 ℓ5) I3f
29 (SK11 ℓ5) I4
30 (SK11 ℓ4) I3e
31 (SK11 ℓ5) I4
32 (SK8 ℓ2) I3i
33 (SK8 ℓ2) I3i
器高：[20]cm
0
10cm
(2/5)
1～32
0
10cm
(1/4)
33

図10　土坑出土遺物

図11　土坑・溝跡出土遺物（１）

ら北西に向かって延び，西側の未調査区へと続いている。南から順に１から番号を付けた。

１・２号溝跡　ＳＤ１・２（図２・３・11・12，写真６）

１号溝跡は，途中２箇所ほど途切れながら，Ｎ55°Ｗの方向に約29ｍ延びていることを確認した。図３上段の土層断面Ａ－Ａ’を見ると，断面形状は，逆台形に掘り込まれ，幅は上端で最大約２ｍ，深さ約70㎝を測る。底面は概ね平らで，周壁は底面から急な角度で立ち上がる。遺構内堆積土は７層に分けられる。図３下段の土層断面Ｂ－Ｂ’を見ると，１号溝跡は旧表土である黒褐色砂

質土(ＬＩｂ)を掘り込んでいることが分かる。土層断面Ａ－Ａ'，Ｂ－Ｂ'のいずれも，レンズ状の堆積が観察できることから，自然堆積土と考えている。遺物は，ℓ１から縄文土器片４点，珪質頁岩製の剥片２点が出土した。図11－39の深鉢形土器胴部片は，横位の沈線文を描いている。図12－９は珪質頁岩製の縦長剥片で，末端に細かい剥離が入る。

２号溝跡は，ＳＤ１の約３m北側を，ＳＤ１に並行する。本溝跡は段丘の崖際に沿っているため，段丘下への土砂流出防止など安全対策上から調査区北西隅部分の長さ約５mほどの調査しかできなかった。図３中段の土層断面Ａ－Ａ'を見ると，幅は最大2.9m，深さは約85cm，断面形状は北壁が崩れているものの，本来はＳＤ１と同様に逆台形であったと考えている。底面は概ね平らで，周壁は南壁で急な角度で立ち上がるものの，北壁は崩れて緩やかな傾斜となっている。遺構内堆積土は６層に分けられ，暗褐色砂質土(ＬⅡ)を掘り込んでいることが分かる。土層断面にレンズ状の堆積が観察できることから，自然堆積土と考えている。２号溝跡から遺物は出土していない。

１・２号溝跡はともに，土層断面に水成堆積によるような複雑な堆積状況を確認できなかったことから，溝跡内を常時水が流れていた状態は考えられない。このことから，段丘上から，北側の段丘裾に沿って東西に走る旧道(国道114号線完成以前に利用されていた)まで，行き来するための道として利用された可能性を考えている。時期については，溝跡の掘り込み面と，地元(字原地区)の住民の話しを含めて判断すると，近代以前と考えている。　(阿　部)

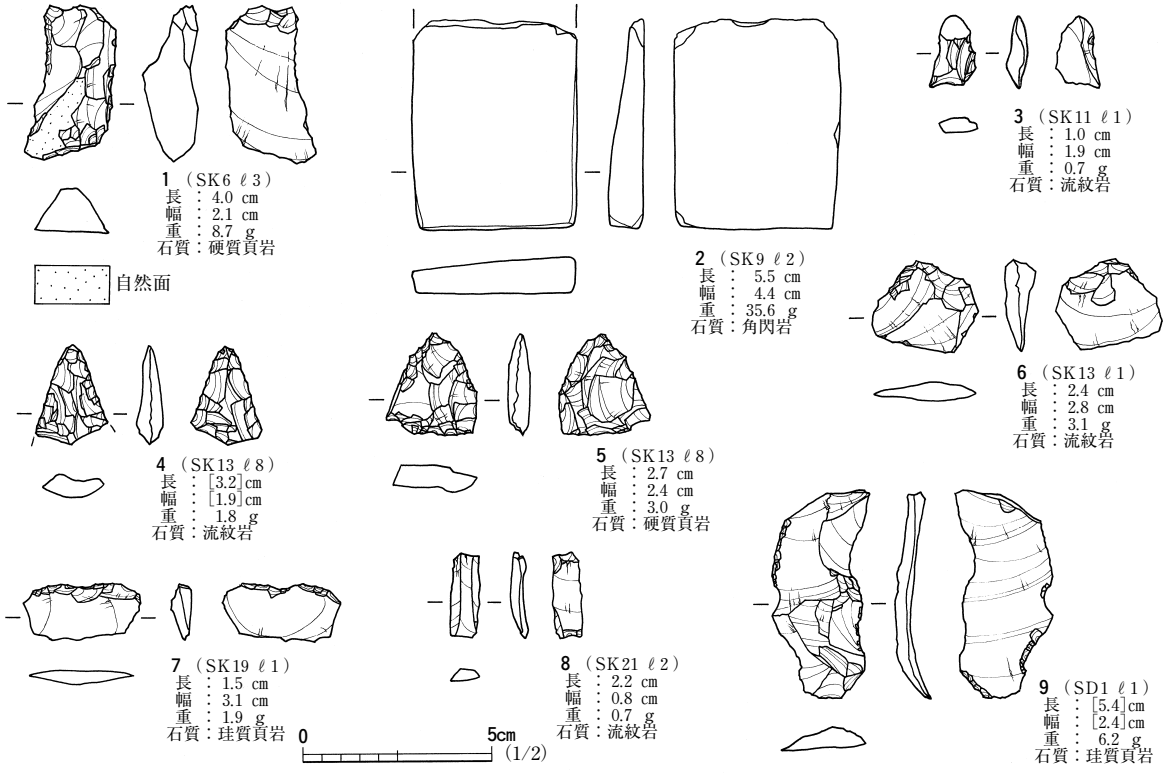


図12　土坑・溝跡出土遺物(２)

第６節　遺 物 包 含 層

原Ｂ遺跡の調査区内では，段丘北側周辺において遺物包含層が形成されていた。調査の段階では，ＬＩ～Ｖの５層に区分し調査を進めた。これらの層については第２章第１節で報告した。

また，遺構外出土遺物については，一辺５ｍのグリッドごとに取り上げ，遺物にはグリッド番号と併せて出土層位も付した。以下では，包含層から出土した遺物について報告するが，表土や小穴から出土した遺物についても本節で扱う。

遺物の出土状態（図13）

原Ｂ遺跡の発掘調査で出土した土器点数は409点である。出土土器の主体を占めるＩ群土器の出土点数は162点である。確認できた堆積土層ごとの出土量は，ＬＩが94点，ＬⅡが40点，ＬⅢが29点，このほか小穴が１点である。ＬＩから出土した点数の中には，ＬＩａとした盛土を含む表土から出土したものと，旧表土としたＬＩｂから出土したものが混ざっている。

図13には土器出土量の平面分布図を示した。段丘北側にはＬⅡとＬＩｂの２層が遺存していたため，１次調査区の北西と南東側の２箇所に出土量の多い傾向が伺える。一方，中央部及び南西側は宅地及び耕作等による造成が著しかったためほとんど出土していない。

また，図13下段の平面分布図を見ると，遺物の集中した南東側のグリッド内(図右上)には，縄文時代早期の土坑が位置している。20号土坑周辺のように，耕作等による土地の改変が土坑の検出面であるＬⅣ上面まで及んだ地点も確認できたことから，もともと遺構内にあった遺物を，包含層の遺物として取り上げてしまったことが影響している可能性が高い。

遺　　物（図14～16，写真６）

Ｉ群 土 器　図14－１の深鉢形土器片は１類に分類され，器面に重層山形押型文を施し，胎土には繊維混和痕が認められる。２類は無文土器で，包含層出土の破片は細片のため図示していない。

図14－２～37の沈線文系土器群は，３類とし，さらに地文と施文手法の種類によってａ～ｊ種に区分した。図14－３～５はａ種に分類され，細く浅い沈線で直線の図柄を描き，それら沈線に挟まれた部分に格子目を描き埋めている。同図５には斜位の刺突も認められる。同図２・16はｂ種で，無文地に太い単一沈線で直・曲線文を描く。

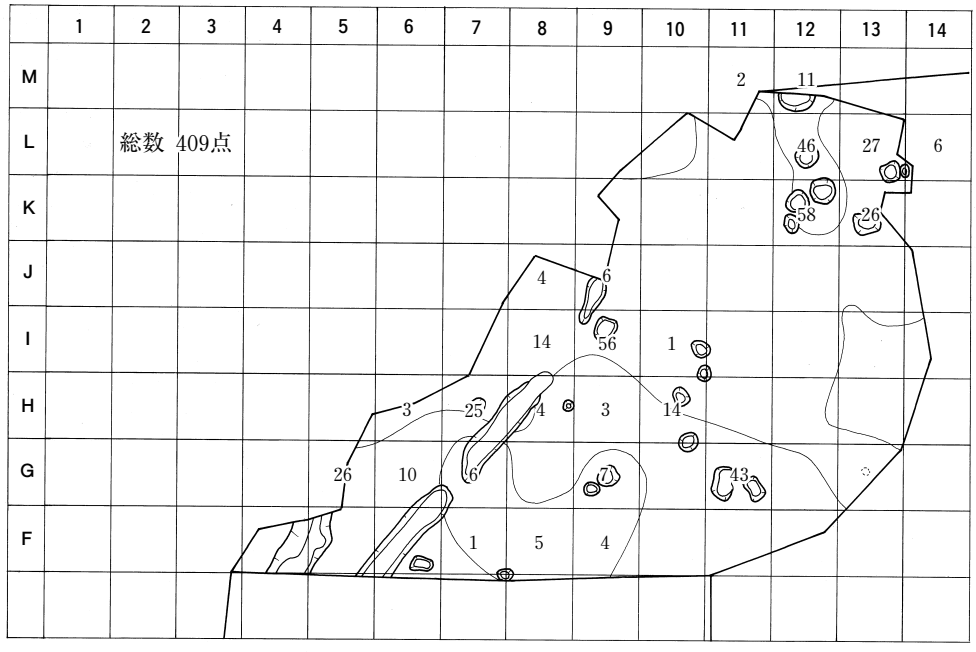
同図12・14・17・22の深鉢形土器片はｃ種で，無文地に並行沈線で文様を描いている。同図12・14の口縁部片は，上部に横位の沈線を多条巡る。同図17は斜位の沈線を多条施す。同図22の口縁部片は，半截竹管状工具で矢羽根状の文様を多段に描き，端部に刻みを入れている。

同図18～21は，無文地に貝殻腹縁文の見られる土器片である。同図19・20のｄ種は器面に貝殻腹縁文のみを，同図18・21のｅ種は平行沈線と貝殻腹縁文を組み合わせて施文する。

同図24～34のｆ種は，無文地に平行沈線と「Ｖ」字形の有節沈線，または同図32・34のように「[」字状の押し引き文を組み合わせて施文している。

同図11・13・23のｇ種は，条痕地に単一の沈線で文様を描いている。同図11・13は尖底深鉢形土器片で，地文の上に菱形状の沈線文を描いている。同図６～９のｈ種は，条痕地に半截竹管状工具で，縦位の区画線を描いた後，菱形状になるように多条の斜線を引いたものと考えている。同図10・24のｉ種は，かすかな条痕地に，平行沈線と「Ｖ」字形の有節沈線を組み合わせて施文している。

同図35～37のｊ種は，半截竹管を束にした工具を用いて，口縁端部に沿って刺突を施している。



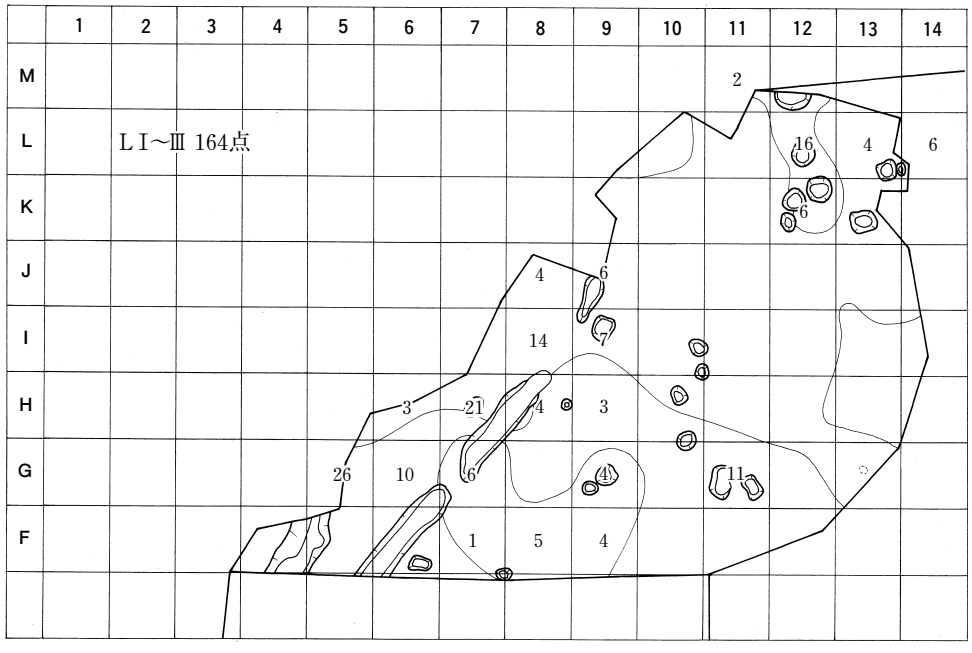


図13　グリッド別出土遺物点数

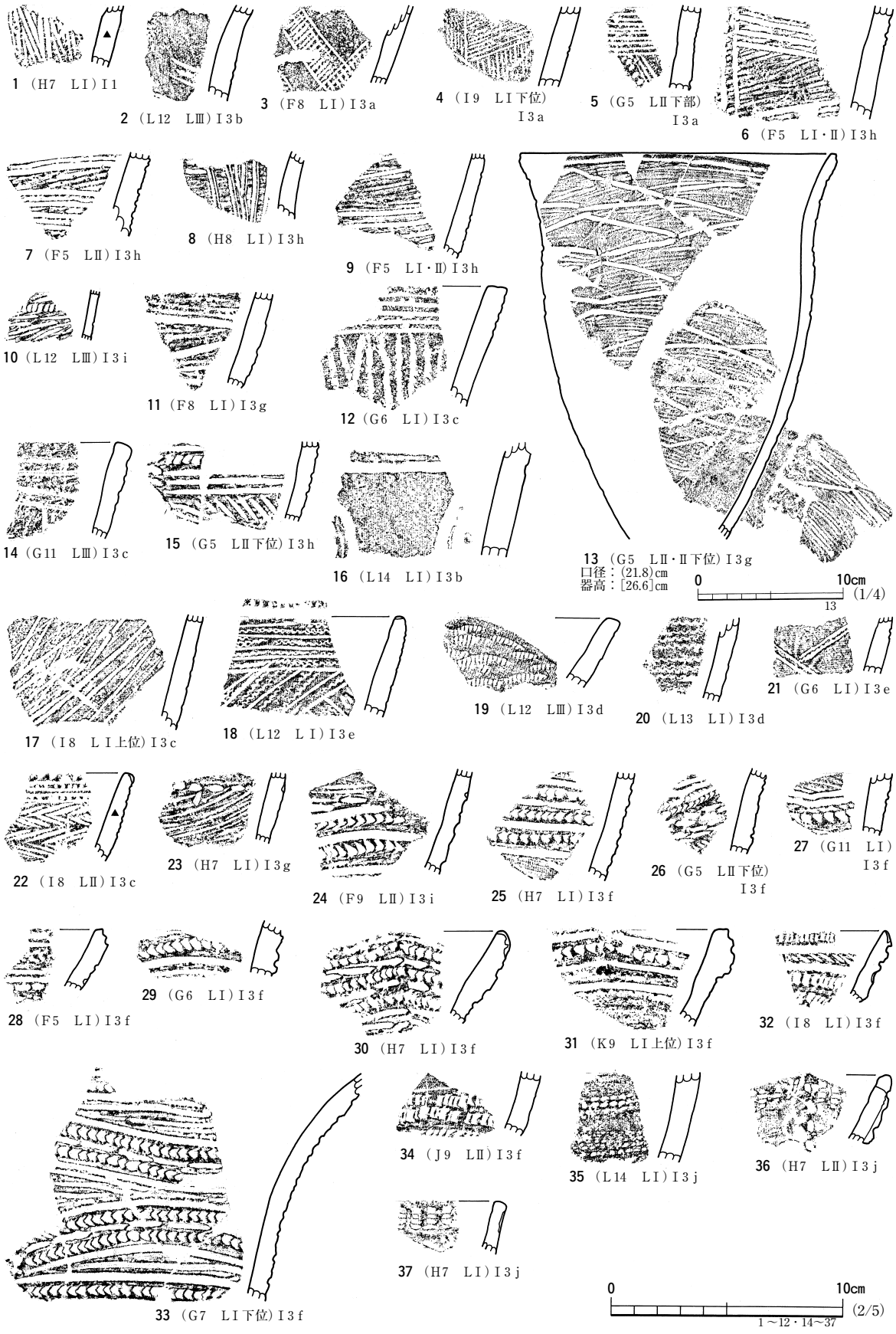


図14　遺物包含層出土遺物（１）

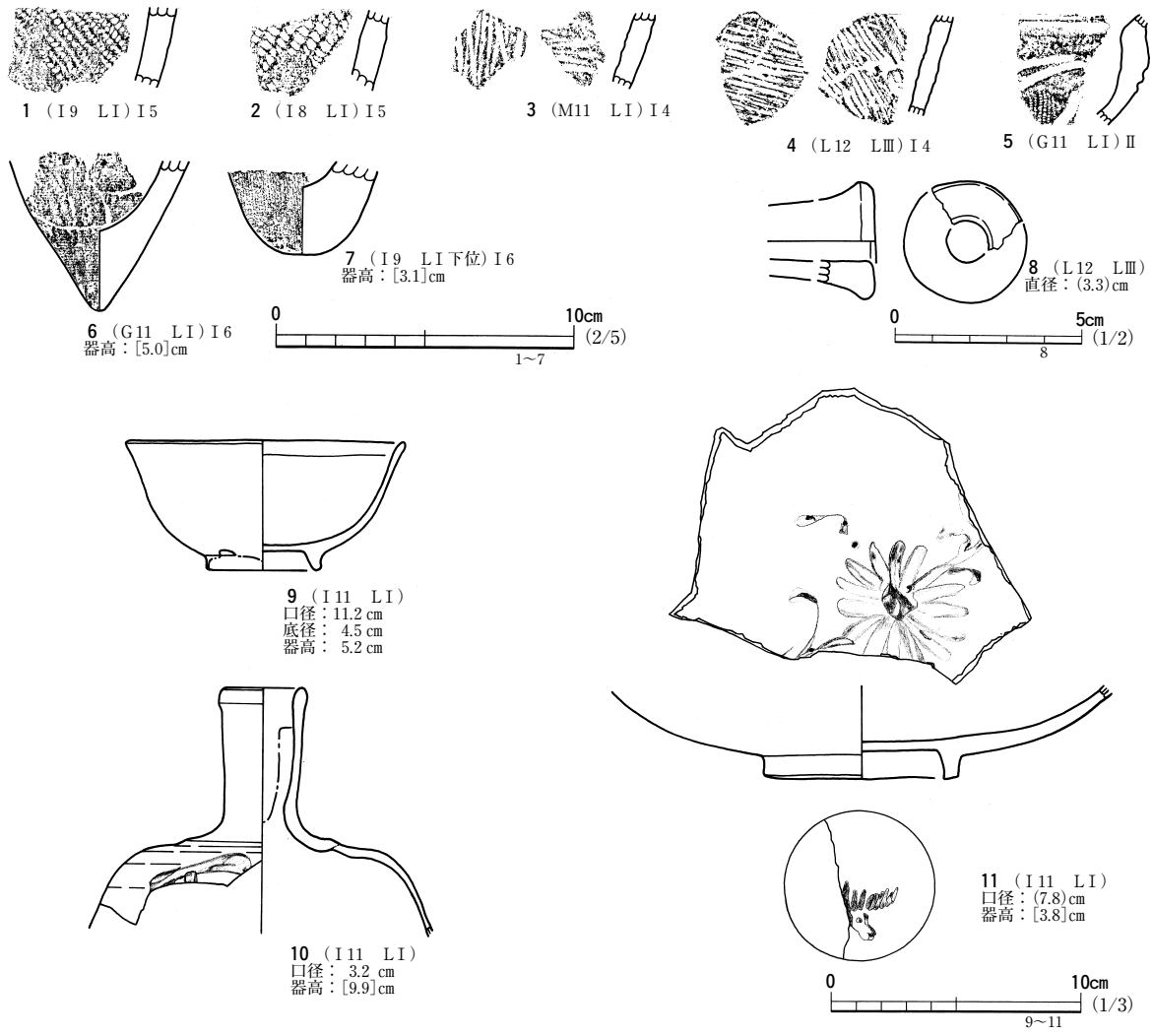


図15　遺物包含層出土遺物（２）

図15－３・４の４類は，内外面に条痕文を施し，胎土中に繊維混和痕が認められなかった。

図15－１・２の５類は，斜縄文を地文としている。図15－６・７の６類は，器面を丁寧にナデた尖底深鉢形土器の底部片である。

Ⅱ群土器　Ⅱ群土器は縄文時代晩期中葉の鉢形土器片で，図15－５に示した１点のみ出土した。５の器面には沈線で区画した内部に斜縄文を施している。

土製品　図15－８は，直径3.3cmほどの筒型の土製品片である。用途は不明である。

石器　包含層中から出土した石器は18点で，その大半は珪質頁岩・流紋岩の剥片であった。そのうち15点を図16－１～15に示した。１・２は凹基無茎石鏃で，３はアメリカ式石鏃である。３の石鏃が出土するものの，弥生土器は出土していない。４は上部を欠損した硬質頁岩製の縦型石匙片で，両面に加工が及んでいる。５は幅広いつまみを持った石英製の石錐で，錐身の先端を欠損している。６は珪質頁岩製の小型の打製石斧である。形状は撥形を呈し，両面を整えるために調整剥離を入念に加えている。７～11は２次加工のある硬質頁岩の剥片である。７・９の末端には細かい剥離が入る。12～14は珪質頁岩の剥片である。

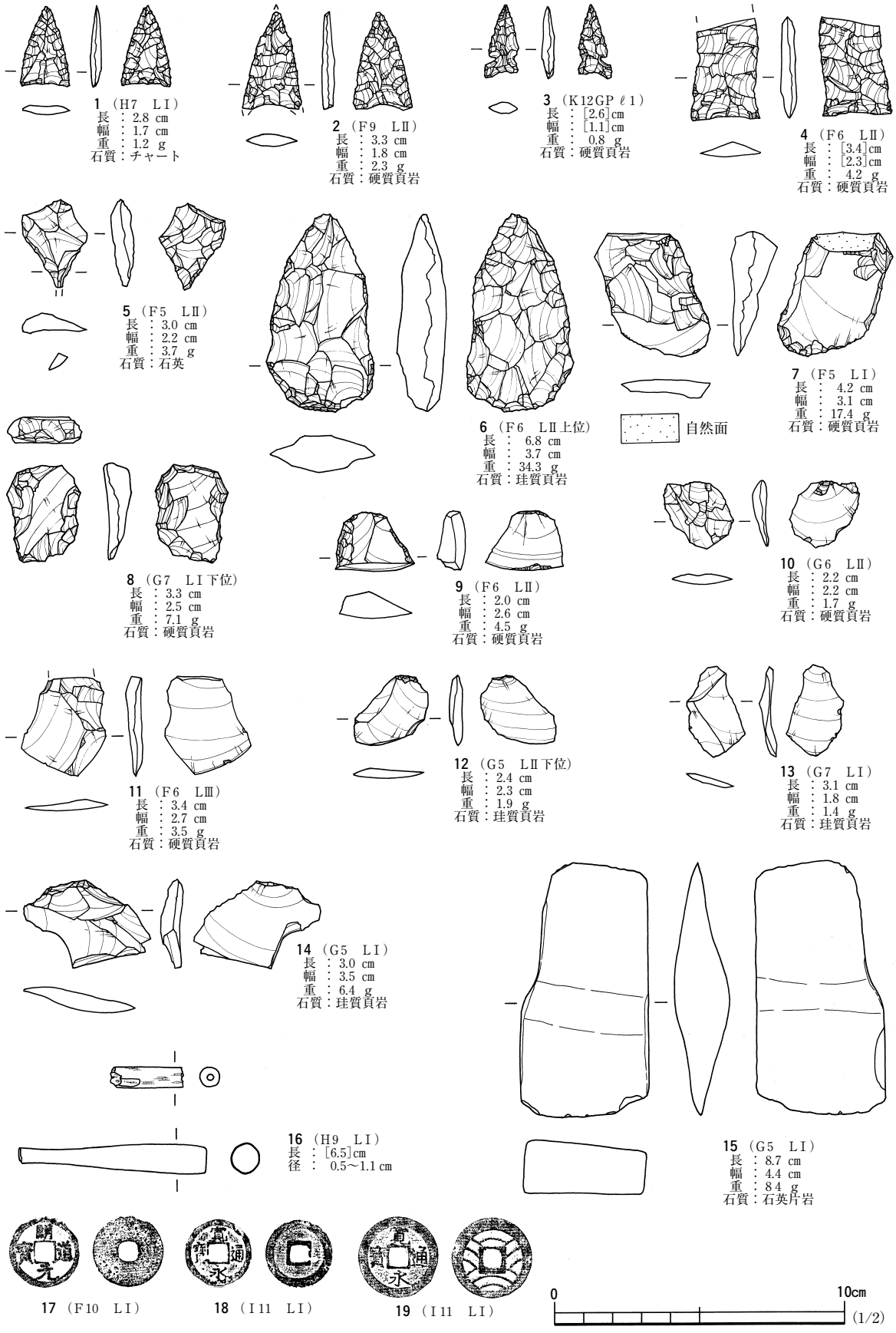


図16　遺物包含層出土遺物（３）

その他の遺物（図15・16）

原Ｂ遺跡の１次調査区からは計52点の陶器片が出土している。特に調査区中央部のＩ10・11グリッド周辺のＬＩａからはまとまって陶器片とともに砥石，古銭，煙管が出土している。出土範囲は，江戸時代から昭和時代のはじめころまで野鍛冶を生業としていた宅地があった位置にあたる。そのため，図示していないが，土中からは拳大の鉄滓も数点出土している。

陶　　器　器種は，椀，皿，卸皿，土瓶，徳利，甕，火鉢，仏飯器またはひょうそくである。中には，施釉されていない甕の破片もみられた。このうち，椀，徳利，皿を図15－９～11に示した。９は端反りの椀で，内外面に灰釉を施す。10は肩部の張った徳利の破片で，胴部には釉薬の上から「百」と見られる字が書かれている。11は直径20㎝を超える皿の破片で，器面中央には菊花文様を，高台の底裏には馬の文様を筆書きしている。時期については，近世から近代頃と考えている。

砥　　石　図16－15は石英片岩製の砥石で，前述する陶器片とともに出土し，近世～近代頃の所産と考えている。

煙管・古銭　図16－16～19は，前述した陶器片の出土したＩ11グリッドとその周辺から出土した煙管と古銭である。16は煙管の吸口で，中に直径0.7㎝ほどの竹（付編２参照）を用いた軸（らう）部分が遺存していた。17～19は古銭で，17は北宋銭の明道元寶の模鋳銭で，初鋳造が1032年である。18・19は寛永通宝で，18は文字の特徴から，寛永期から明暦期（1626～1659年）にかけて鋳造された通称「古寛永」と呼ばれるものと考えている。　（阿　部）

第３章　ま　　と　　め

Ｉ群土器について（表１）

原Ｂ遺跡の発掘調査で出土した土器の総点数は約409点である。出土土器の大半は縄文時代早期中葉に比定されるＩ群土器で，器種は深鉢形土器で構成され，破片資料がほとんどで，全体の器形の分かる資料は出土していない。以下にＩ群土器の各類，各種ごとに特徴等を記す。

１類（図10－１・８，図11－１・７・20・22・23，図14－１）　１類は日計式押型文土器で，分類可能なＩ群土器の破片のうち１類の閉める割合は全体の７％ほどである。胎土には繊維混和痕が見られ，器面には多重山形文と横位区画線を施している。

２類（図10－16・25，図11－２・21・25）　２類は薄手の無文土器で，出土の割合は全体の約６％ほどである。口縁部は平縁で外傾する。器面はナデを基本に調整されている。図10－25の器面には，ナデ調整を施した後，ミガキを加えている。

３類（図10・11・14・15）　３類は沈線文系土器群である。分類可能であったＩ群土器の破片のうち３類は64.2％を占めている。器形は尖底の深鉢形土器で，口縁部が緩やかに外傾するものが認め

られる。文様の施文技法などからａ～ｊ種の10種類に分けられ，以下に各種の概要を記す。

ａ～ｆ種は無文地の上から沈線，貝殻腹縁圧痕を用いて施文している。ａ種(図10－15・24，図11－34，図14－３～５)は三戸式土器で，その出土割合は約２％とわずかである。口縁部は外傾し，端部は内削ぎ状で，細い刻み目も施されたもの(図10－15)も認められる。

ｂ種(図10－９・14，図11－５，図14－16)は，単一の沈線で直曲線文を描くものである。図14－16は太く深い沈線で二重の同心円文を描く。図10－９は太い沈線で矢羽根状の文様を描いている。ｃ種(図11－９・28・30・37・39，図14－12・14・17・22)は，平行沈線によって文様を描く。図11－９・39，図14－12は横または縦位に多重の平行沈線を，図14－22は短沈線で矢羽根状文様を多段に施す。

ｄ・ｅ種は，共に貝殻腹縁文を施し，両者の出土割合は全体の3.8％と少量である。ｄ種(図11－３・４・26，図14－19・20)は，貝殻腹縁文のみを多段に施文している。ｅ種(図10－10・30，図11－27・29・31，図14－18・21)は，貝殻腹縁文と沈線を組み合わせて施文している。内削状の口縁部片の図10－10は多重の平行沈線の上に，図10－30は沈線区画内に貝殻腹縁文を充填する。

ｆ種(図10－11・12・26～28，図11－８・11～14・24，図14－25～34)は，沈線と押し引き文で施文する。押し引き文には，図10－32・33，図14－32・34に見られる「[」状を呈した「キャタピラ状」と呼ばれる幅広いものと，それ以外に見られる「Ｖ」字状のものが見られる。後者の押し引き文が大半を占める。図11－13，図14－26・28・30は沈線文・押し引き文と共に短沈線が併用されている。

ｇ～ｉ種の地文に浅い条痕がつけられ，その上から沈線文・押し引き文を施す。ｇ種(図10－17，図14－11・13・23)は条痕地に沈線文を描く。図14－13は太い沈線で菱形状の文様を多段に施文している。ｈ種(図10－２～４・21～23，図14－６～９・15)は，条痕地に平行沈線で直曲線文を描く。図10－２～４は器圧薄い尖底深鉢形土器片で，条痕地に２本１単位の沈線で横に区分し，その区画内部に沈線を蛇行させている。ｉ種(図10－32・33，図11－６・10・15，図14－10・24)は，沈線文・押し引き文と共に短い沈線を加えて施文する。図10－34は，条痕地の上から幅広いキャタピラ状の押し引き文帯と菱形状の沈線文帯を交互に施文する。

表１　原Ｂ遺跡Ｉ群土器の出土割合

			縄文土器出土遺構・遺物包含層																		分類可能な破片数	出土割合(%)
			ＳＫ１	ＳＫ２	ＳＫ４	ＳＫ５	ＳＫ６	ＳＫ８	ＳＫ10	ＳＫ11	ＳＫ13	ＳＫ16	ＳＫ18	ＳＫ19	ＳＫ20	ＳＫ21	ＳＤ１	ＬＩ	ＬⅡ	ＬⅢ		
縄文土器分類	Ｉ群土器	1	1	1	1					1	6			3	1			2			16	7.5
		2			8				2		1	1		2							14	6.6
		3a				1			1	1					1						4	1.9
		3b		1	7	1			3		4				1			4			21	9.9
		3c		1	2					2	2		1	3	1		1	7		2	22	10.4
		3d	1								2		1								4	1.9
		3e		1									1	2							4	1.9
		3f	1		3				3	1	10	3						12	9	1	43	20.3
		3g	1		1					1	2							2	1		8	3.8
		3h	3				1		7									3		2	16	7.5
		3i						2			3							6			11	5.2
		3j																2	1		3	1.4
		4	1		3	1				13	2			1		1		6	1	2	31	14.6
		5							1		5			1	1			5	1	1	15	7.1
																					212	100.0

※　未掲載の破片についても分類し表中に書き足した。
※　出土土器のうち細片または特徴的な文様がなく分類できなかった「Ｉ群６類」については割愛した。
※　複数の破片が１個体または１欠片に接合したものについては「１点」と数え直した。

ｊ種(図14－35～37)は常世１式土器で，半截竹管の束または櫛歯状工具を用いて，器面に押し引き文または連続刺突文を施している。ｊ種の出土割合は全体の1.7%とごく少量である。

４類(図10－６・18～20・29・31，図11－32・33，図15－３・４)　４類は内外面に条痕文を施し，出土割合は全体の14.6%ほどであった。器厚と胎土中の繊維混和痕の有無で大別できる。図10－６・29・31，図11－32，図15－４は厚さ５㎜ほどと薄く，胎土中に繊維混和痕が見られないことから，茅山下層式土器とは異なる様相が認められる。

５類(図11－16～19，図11－38，図15－１・２)　５類は斜縄文を施し，出土割合は約７%である。

６類(図10－７・13，図15－６・７)　６類は，特徴的な施文が認められず１～５類の分類ができなかった土器片である。図15－６・７は１～５類いずれかの尖底深鉢土器の底部片である。

以上，Ⅰ群１～６類のうち主体を占めた「Ⅰ群３類」の時期は，貝殻沈線文系土器期にあたる。このうち「Ⅰ群３類」の中で全体出土量の25.5%を占めた３類ｆ・ｉ種は田戸上層式土器，出土量の11.3%を占める３類ｂ・ｃ・ｇ・ｈ種については田戸下層式土器に比定できる。

また，日計式押型文土器(Ⅰ群１類)は7.5%，薄手無文土器(Ⅰ群２類)は6.6%，三戸式土器(Ⅰ群３類ａ種)は1.9%とそれぞれ全体量に比べごく少量で客体的な様相が伺える。押型文土器，無文土器は，本遺跡の出土状況から判断して，沈線文系土器(Ⅰ群３類)に併行する可能性が高いと考えている。沈線文系土器が押型文・無文土器に併行する状況は，近年の県内の調査事例では田村郡小野町にある西田Ｈ遺跡などでも認められている(高橋2005)。また，４類としたうち薄手の条痕文土器や，５類の土器についても，出土量は極少量であるが沈線文系土器に併行すると考えている。

縄文時代早期中葉の土坑について

原Ｂ遺跡の発掘調査で検出された遺構は，土坑21基，焼土遺構１基，溝跡２条である。このうち出土遺物から縄文時代早期中葉頃と考えている遺構は，14基の土坑である。

土坑の分布は，調査区中央部と南西部に偏在し，特に南西部には８基の土坑(ＳＫ２・４・10・11・18～21)が重複することなく集まっている。土坑の平面形は，13号土坑のみ不整な隅丸長方形を呈し，残りの13基については不整円形(楕円形)を呈する。８号土坑を除く13基の土坑の断面形状は，逆台形状を呈し，性格は形状から判断して貯蔵穴と考えている。規模は直径(長軸)134～204cmで170cm以上のものが大半を占める。

原Ｂ遺跡からは住居跡は確認できていない。しかし，１号焼土遺構が住居跡に伴う炉跡であったと推定するならば，段丘崖際に屋外貯蔵施設である貯蔵穴を造り，居住域については耕作や宅地によって既に削平を受け確認のしようも無いが，調査区の南側を中心に存在した可能性を考えている。

(阿　部)

参考文献

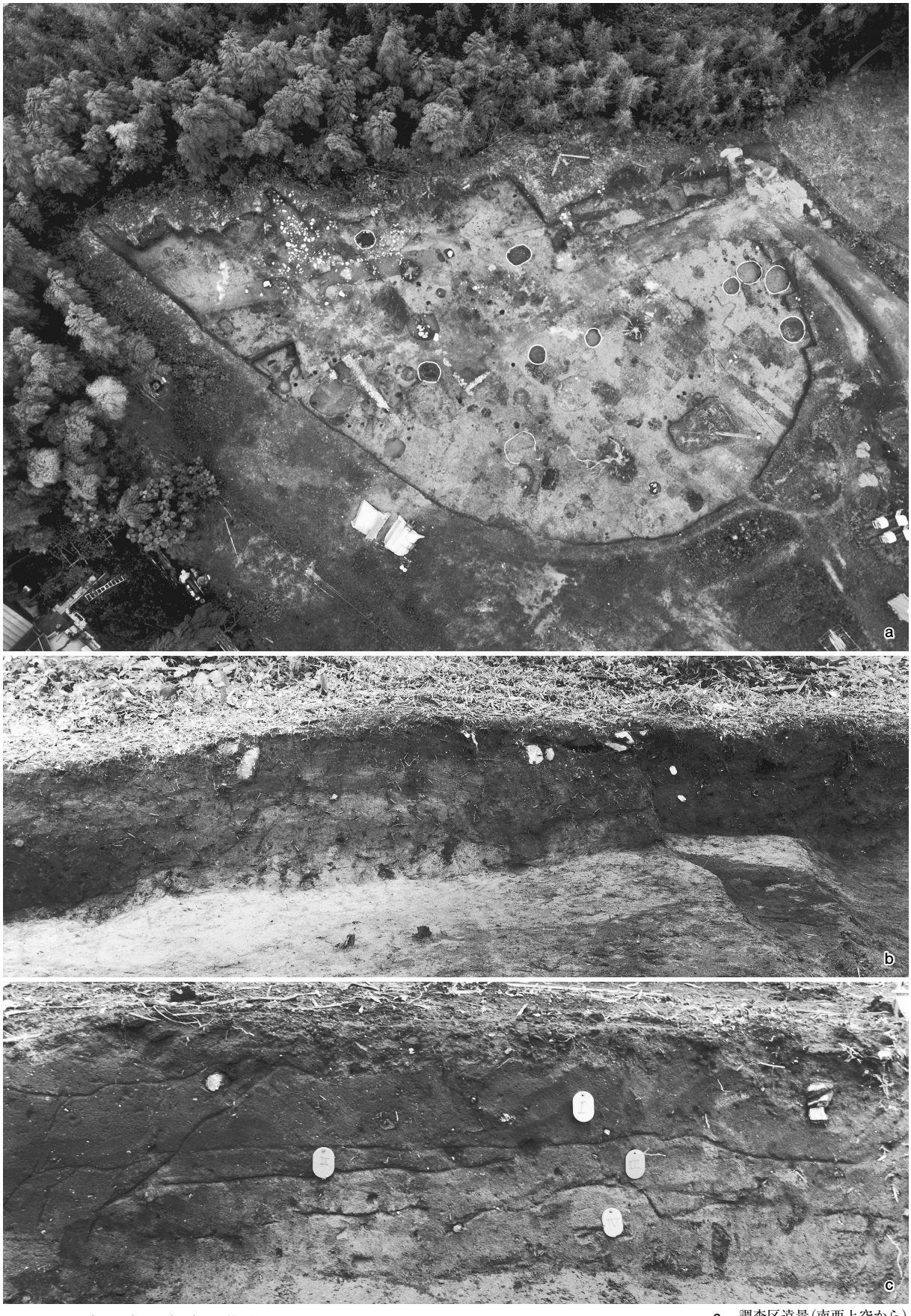
福島県教育委員会　1997 『福島県内遺跡分布調査報告３』，2006 『福島県内遺跡分布調査報告12』

鈴鹿良一ほか　1991 『矢吹地区遺跡発掘調査報告８』 1996 『摺上川ダム遺跡発掘調査報告Ⅱ』福島県教育委員会

高橋信一ほか　2005 「西田Ｈ遺跡」『こまちダム遺跡発掘調査報告３』 福島県教育委員会

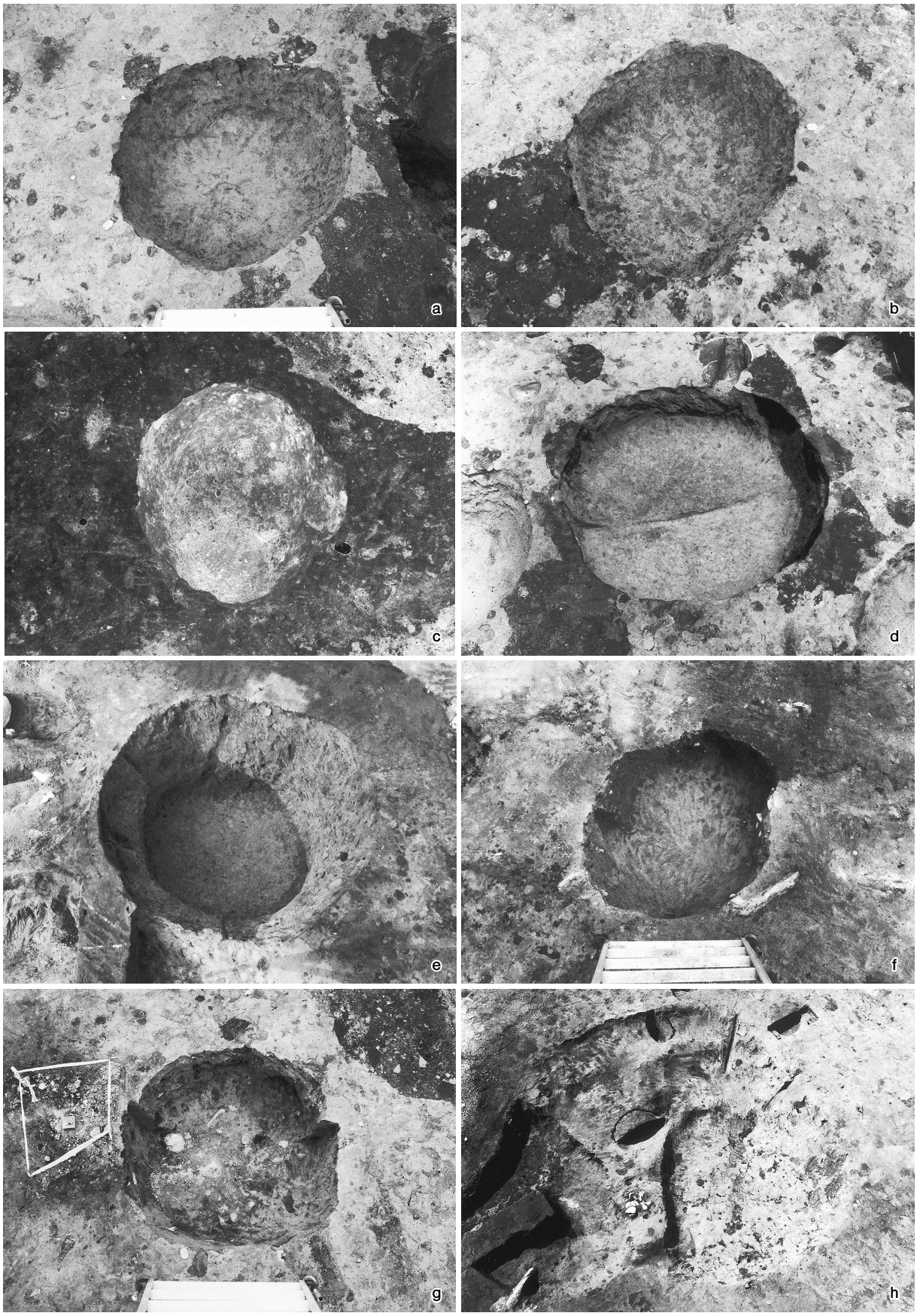
1　調査区全景（1）

a　調査前調査区近景（南から）
b　調査区遠景（北上空から）



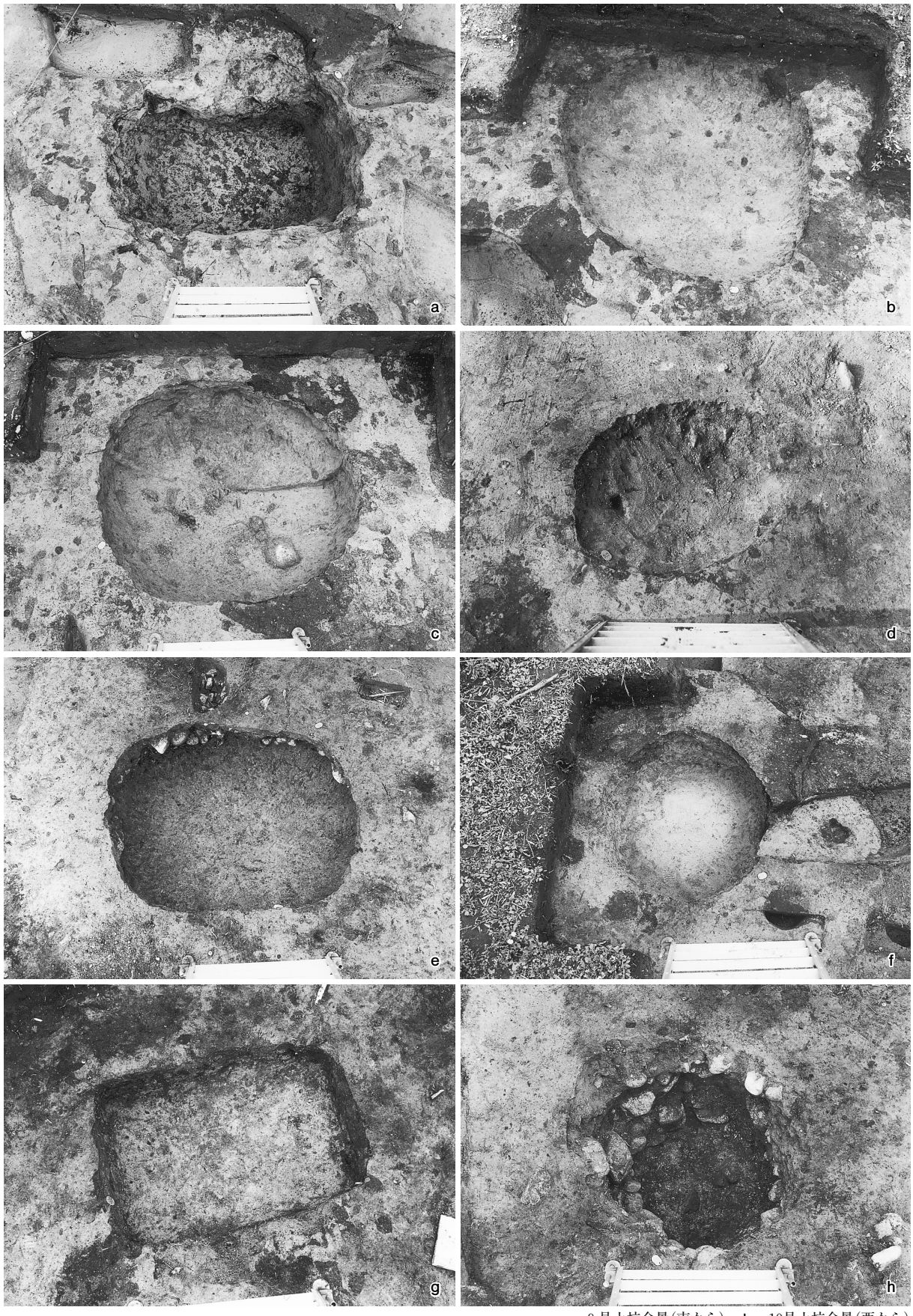
2　調査区全景（２），基本土層

a　調査区遠景（南西上空から）
b　基本土層１（東から）
c　基本土層２（南から）



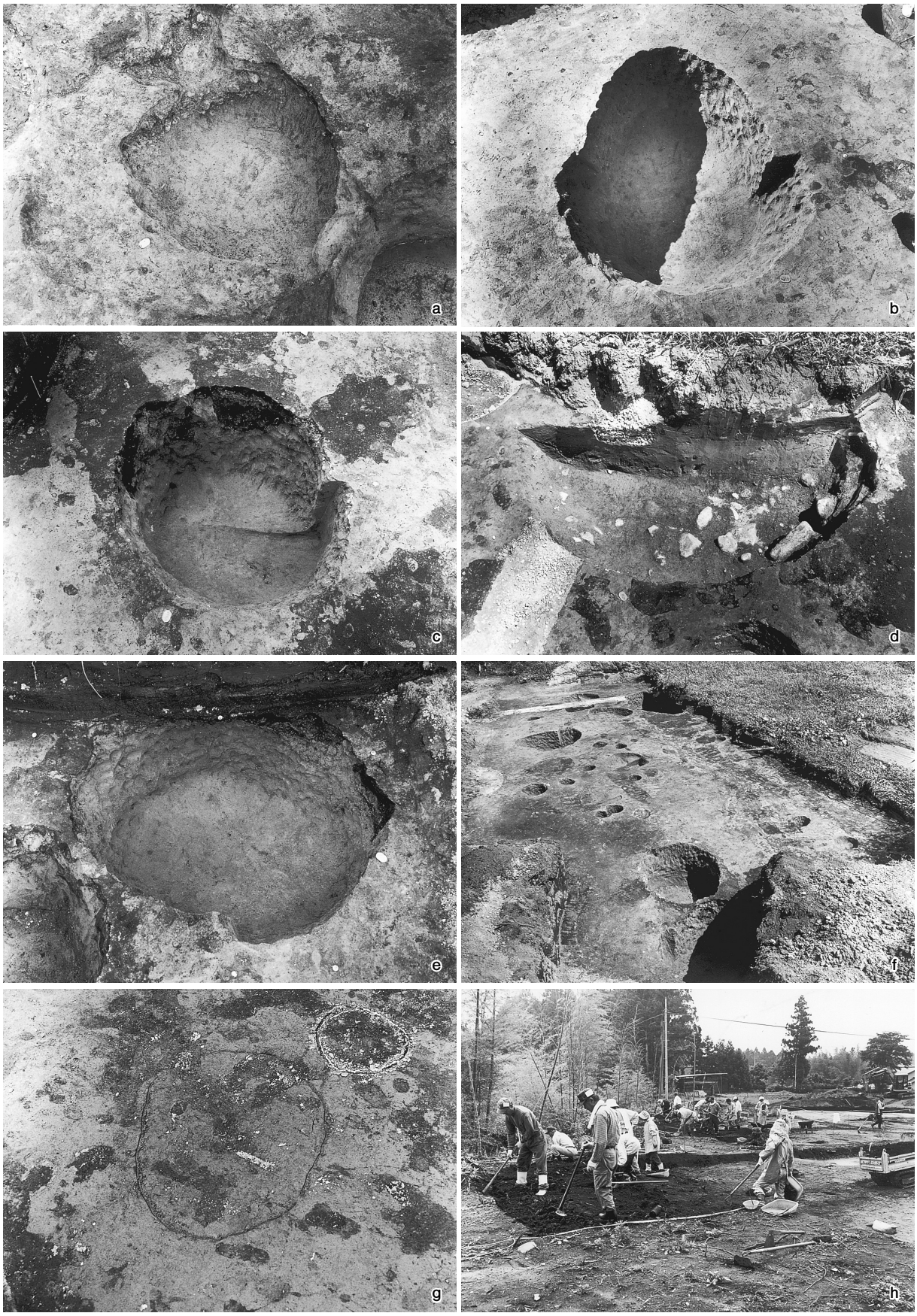
3　土坑（1）

a　1号土坑全景（東から）　**b**　2号土坑全景（南から）
c　3号土坑全景（南から）　**d**　4号土坑全景（南から）
e　5号土坑全景（南から）　**f**　6号土坑全景（南から）
g　7号土坑全景（南から）　**h**　8号土坑全景（東から）



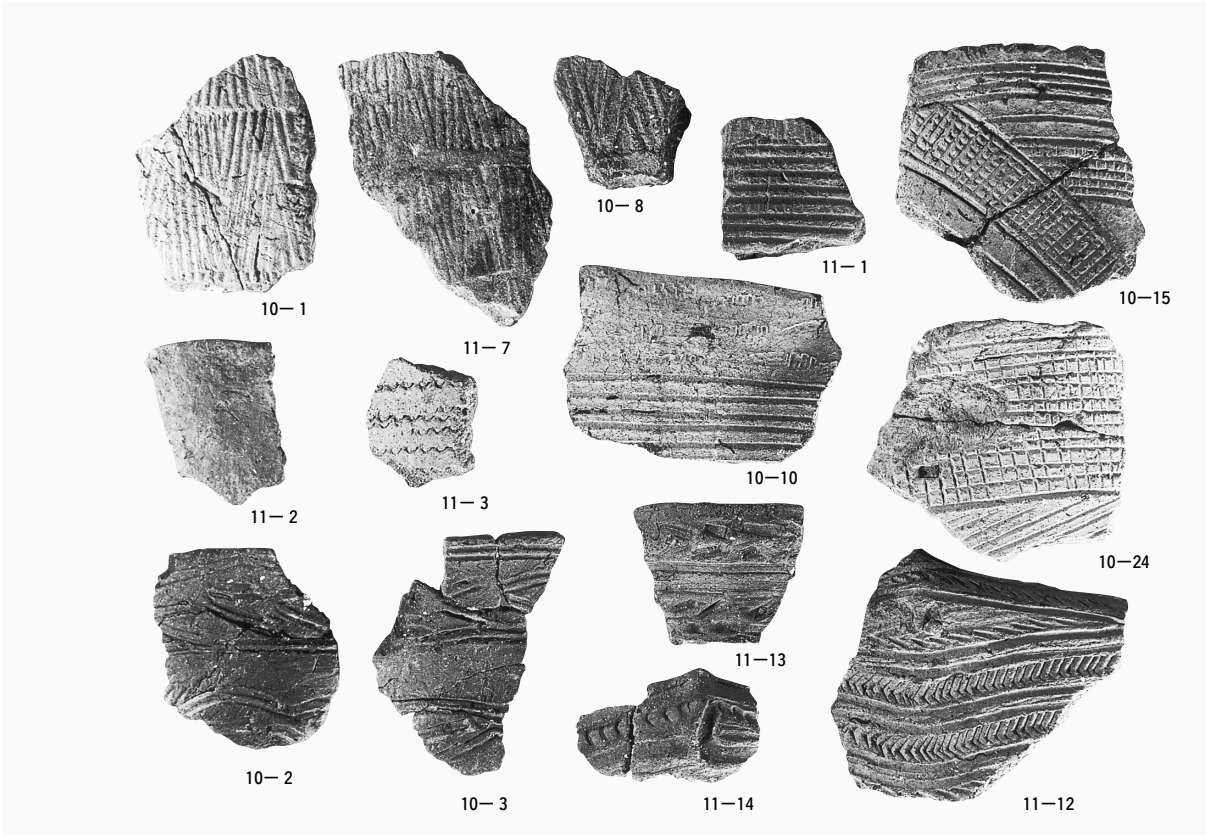
4　土坑（２）

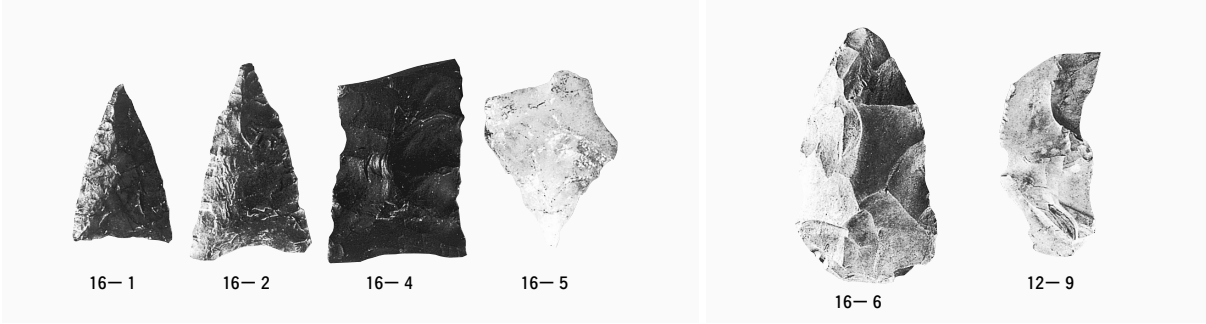
a　９号土坑全景（南から）　**b**　10号土坑全景（西から）
c　11号土坑全景（西から）　**d**　12号土坑全景（南から）
e　13号土坑全景（南から）　**f**　14号土坑全景（南から）
g　15号土坑全景（東から）　**h**　16号土坑全景（南から）



5　土坑（３），焼土遺構

a　17号土坑全景（南から）
b　18号土坑全景（東から）
c　19号土坑全景（北から）
d　20号土坑全景（西から）
e　21号土坑全景（西から）
f　調査区東側近景（南から）
g　１号焼土遺構全景（南から）
h　作業風景（北西から）


10－1
11－7
10－8
11－1
10－15
11－2
11－3
10－10
10－24
11－13
10－2
10－3
11－14
11－12


16－1
16－2
16－4
16－5
16－6
12－9

6　出土遺物